

IBM Interact

バージョン 9 リリース 0

2013 年 1 月 15 日

インストール・ガイド

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、75 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Interact バージョン 8 リリース 6 モディフィケーション 0 および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Interact
Version 9 Release 0
January 15, 2013
Installation Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2012.12

© Copyright IBM Corporation 2001, 2013.

目次

第 1 章 インストールの準備	1
Interact 基本インストールのチェックリスト	1
他のシステム・コンポーネントとの Interact のインストール	2
Interact の基本インストール	3
前提条件	4
システム要件	4
IBM Marketing Platform の要件	5
IBM Campaign の要件	5
知識要件	5
クライアント・マシン	5
アクセス権限	5
アップグレードを行う場合、または複数のパーティションを構成する場合	6
第 2 章 IBM Interact データ・ソースの準備について	7
ステップ: データベースまたはスキーマを作成する	7
Interact に必要なデータベースまたはスキーマ	7
ステップ: ODBC またはネイティブ接続を Campaign マシン上に作成する	8
ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する	8
ステップ: JDBC 接続を Web アプリケーション・サーバーに作成する	10
JDBC 接続の作成のための情報	11
IBM Interact データベース情報のチェックリスト	13
第 3 章 ステップ: IBM インストーラーを入手する	15
インストール・ファイルのコピー (DVD のみ)	16
IBM EMM インストーラーの機能	16
インストーラー・ファイルの単一ディレクトリ要件	16
製品のインストール	16
製品インストール・ディレクトリーの選択	16
インストール・タイプ	17
インストール・モード	17
無人モードを使用して複数回インストールする	18
IBM Interact コンポーネントのインストール先	19
IBM Interact Report Package コンポーネントのインストール先	20
複数の Interact ランタイム・サーバーについて	20
すべての IBM EMM 製品のインストールに必要な情報	22
ステップ: IBM EMM インストーラーを実行する	22
インストール・ウィザード内の移動	23
IBM サイト ID	24
インストーラーの実行後に EAR ファイルを作成する方法	24

第 4 章 IBM Interact の配置前の構成について	27
ステップ: Interact システム・テーブルを作成してデータを追加する	27
ステップ: Interact ユーザー・プロファイル・テーブルを作成する	30
Interact 機能を有効にするためのデータベース・スクリプトの実行	31
ステップ: Interact の手動での登録 (必要な場合)	32
IBM Interact 設計環境を手動で登録する方法	32
IBM Interact ランタイム環境を手動で登録する方法	33
configTool ユーティリティ	33
第 5 章 ステップ: IBM Interact を配置する	39
WebSphere のガイドライン	39
WebLogic のガイドライン	41
第 6 章 Interact の配置後の構成について	43
ステップ: Interact 構成プロパティを設定する	43
ステップ: Interact ランタイム環境のプロパティの構成	43
ステップ: 複数の Interact ランタイム・サーバーを構成する	44
ステップ: テスト実行のデータ・ソースを構成する	45
ステップ: サーバー・グループを追加する	45
ステップ: 対話式フローチャートのテスト実行のためのサーバー・グループを選択する	46
ステップ: コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールを構成する	46
ステップ: Interact システム・ユーザーの作成	47
ステップ: Interact インストールの確認	49
第 7 章 パーティションについて	51
Interact での複数のパーティションのセットアップ	51
第 8 章 すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件	53
アップグレードの順序	54
Interact アップグレード・シナリオ	54
第 9 章 Interact のアップグレードについて	57
Interact のアップグレード	57
Interact アップグレード・ツールについて	57
アップグレード・ログについて	58
パーティションのアップグレードについて	58

アップグレード時のサーバーの始動と停止について	58
Interact 8.5x 以上のバージョンからアップグレードする方法	58
Interact ランタイム環境のバックアップ	59
Interact ランタイム・サーバーの配置解除	59
メモリーからの未使用ファイルのアンロード (AIX のみ)	59
新規バージョンの Interact のインストール	59
SQL アップグレード・スクリプトの確認と、必要に応じた変更	60
環境変数の設定	62
設計環境に対するアップグレード・ツールの実行	64

ランタイム環境に対するアップグレード・ツールの実行	66
Web アプリケーション・サーバーでの Interact ランタイム・サーバーの再配置	69
付録. IBM 製品のアンインストール	71
Interact をアンインストールする方法	71
IBM 技術サポートへの連絡	73
特記事項	75
商標	77
プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項	77

第 1 章 インストールの準備

IBM® 製品のインストールは複数のステップからなるプロセスであり、このプロセスには IBM が提供しないさまざまなソフトウェア要素とハードウェア要素の処理が含まれています。IBM 資料には、IBM 製品のインストールに必要な特定の構成や手順に関するガイダンスが記載されています。ただし、IBM が提供しないシステムに関する作業の詳細については、その製品の資料を参照してください。

IBM EMM ソフトウェアのインストールを開始する前に、インストールの計画を立ててください。これには、ビジネス目標や、それをサポートするために必要なハードウェアおよびソフトウェア環境が含まれます。

Interact 基本インストールのチェックリスト

このセクションでは、Interact の基本インストールを実行するために必要なステップについて、ハイレベルな概要を要約して示します。ここにリストされた各ステップについては、指示されているように、この文書の他の箇所でより詳しく説明されています。

データ・ソースの準備

1. 7 ページの『ステップ: データベースまたはスキーマを作成する』

データベース管理者と共に作業して、Interact ランタイムのデータベースまたはスキーマ、および設計時システム・テーブルを作成します。

2. 8 ページの『ステップ: ODBC またはネイティブ接続を Campaign マシン上に作成する』

必要な場合、設計環境のテスト実行テーブルを保持するデータベースへの ODBC またはネイティブ接続を作成します。

3. 8 ページの『ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する』

データベース・ドライバーを、設計時およびランタイムのコンポーネントがインストールされた Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに追加します。

4. 10 ページの『ステップ: JDBC 接続を Web アプリケーション・サーバーに作成する』

必須の JNDI 名および推奨される JNDI 名を使用して、Interact、Campaign、および Marketing Platform システム・テーブルへの JDBC 接続を作成します。

IBM Interact をインストールします。

1. 15 ページの『第 3 章 ステップ: IBM インストーラーを入手する』

IBM、Interact、および Interact レポート・パッケージ・インストーラーを含むメディアを、ダウンロードするかまたは見つけます。

2. 22 ページの『すべての IBM EMM 製品のインストールに必要な情報』

必要なデータベースおよび Web アプリケーション・サーバーの情報を収集します。

3. 22 ページの『ステップ: IBM EMM インストーラーを実行する』

Marketing Platform がインストールされた状態で、Interact コンポーネントをインストールします。

配置前の IBM Interact の構成

1. 27 ページの『ステップ: Interact システム・テーブルを作成してデータを追加する』

提供された SQL スクリプトを使用して、Interact の設計時およびランタイムのシステム・テーブルを作成し、データを追加します。

2. 32 ページの『ステップ: Interact の手動での登録 (必要な場合)』

インストーラーが IBM Interact を登録できない場合、Marketing Platform ユーティリティーを使用して手動で登録します。

IBM Interact の配置

1. 39 ページの『第 5 章 ステップ: IBM Interact を配置する』

配置のガイドラインに従って、Interact ランタイム・コンポーネントを配置します (設計時コンポーネントは、Campaign が配置されたときに配置されます)。

配置後の IBM Interact の構成

1. 47 ページの『ステップ: Interact システム・ユーザーの作成』

ランタイム環境および設計環境にアクセスするように、システム・ユーザーをセットアップします。

2. 43 ページの『ステップ: Interact 構成プロパティを設定する』

「設定」>「構成」ページで、設計環境およびランタイム環境を構成するために必要なデータベース・プロパティを設定します。

3. 49 ページの『ステップ: Interact インストールの確認』

Campaign にログインして設計環境を検証し、このガイドに記載されたランタイム URL にアクセスしてランタイム環境を検証します。

他のシステム・コンポーネントとの Interact のインストール

次の図は、IBM アプリケーションをインストールする場所についての概要を示しています。この図には、すべての製品が表示されていますが、Interact にこれらがすべて必要であるということではありません。

このセットアップは、基本的なインストール済み環境を表しています。セキュリティ上およびパフォーマンス上の要件を満たすためには、より複雑な分散インストールが必要となることがあります。

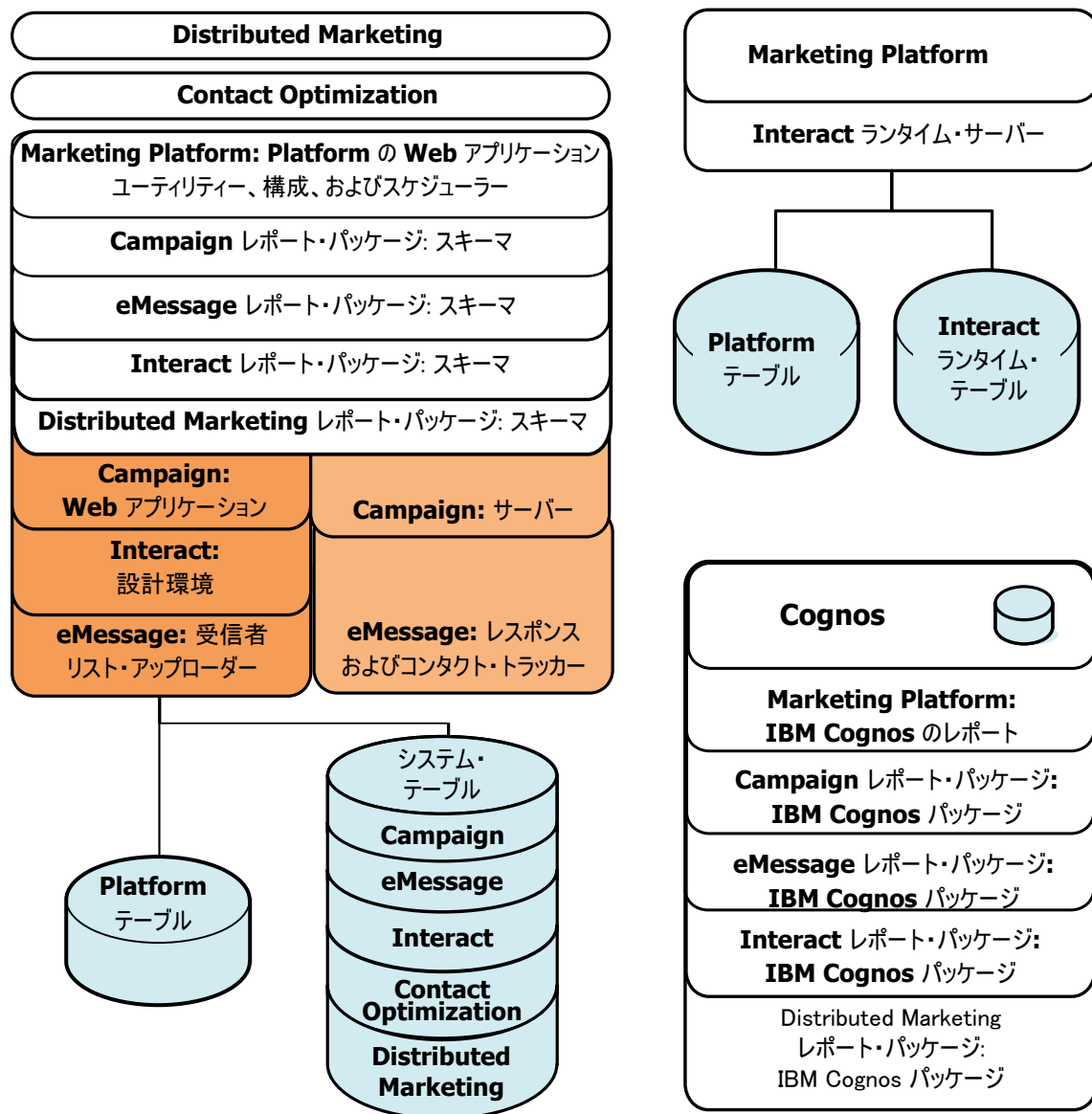


図 1. IBM EMM コンポーネント

Interact の基本インストール

Interact は Campaign アプリケーション・ファミリーのメンバーであり、設計環境およびランタイム環境の 2 つのコンポーネントをインストールする必要があります。

Interact 設計環境をインストールする前に、Campaign および関連する Marketing Platform のインスタンスをインストールして構成する必要があります。

Interact ランタイム環境をインストールする前に、Marketing Platform の別個のインスタンスをインストールする必要があります。ランタイム環境には、Marketing Platform の 1 つのインスタンスと、Interact ランタイム・サーバーの少なくとも 1 つのインスタンスが必要です。同じランタイム環境で作業できるように、Interact ランタイム・サーバーの複数のインスタンスを構成できます。

このガイドに記載された指示は、Interact の基本インストールを正常に行うことができるように設計されています。基本インストールは必要な手順ですが、インストール処理はそこで終わりません。Interact では、ビジネス目標を達成するための使用に備えて、追加の構成手順が通常必要になります。

IBM では、基本インストールが以下のように定義されています。

- 製品のすべてのコンポーネントがインストールされる。
- Campaign システム・テーブルへの管理者レベルのアクセス権限を持つ、設計環境用のシステム・ユーザーが構成される。
- ランタイム環境用のシステム・ユーザーが構成される。

次の表に示されているように、拡張構成に関する情報を見つけることができます。

トピック	ガイド
IBM EMM レポート・スキーマおよびサンプル・レポートのカスタマイズ	「 <i>IBM Marketing Platform</i> 管理者ガイド」および「 <i>IBM Interact</i> 管理者ガイド」
非 ASCII データまたは非 US ロケールの使用の構成	<i>IBM Campaign</i> 管理者ガイド
複数の言語およびロケールの使用の構成	<i>IBM Campaign</i> 管理者ガイド
LDAP および Web アクセス制御システムとの統合	<i>IBM Marketing Platform</i> 管理者ガイド
SSL の構成	<i>IBM Marketing Platform</i> 管理者ガイド

前提条件

以下は、IBM EMM 製品のインストールのための前提条件です。

システム要件

システム要件について詳しくは、インストールを計画している IBM EMM 製品に関する「推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件」ガイドを参照してください。

Java™ 仮想マシン (JVM) の要件

スイート内の IBM EMM アプリケーションの中には、専用の Java 仮想マシン (JVM) に配置しなければならないものがあります。カスタマイズした JVM 設定を必要とする IBM EMM 製品もあります。JVM に関するエラーが発生する場合、IBM EMM 製品専用の WebLogic または WebSphere® ドメインを作成する必要がある場合があります。

ただし、パフォーマンス上の理由により、Interact ランタイムごとに専用の JVM を用意する必要があります。

ネットワーク・ドメイン要件

スイートとしてインストールされる IBM 製品は、クロスサイト・スクリプティングのセキュリティ・リスクを抑えるために設計されたブラウザー制限に準拠するために、同じネットワーク・ドメイン上にインストールする必要があります。

IBM Marketing Platform の要件

IBM EMM 製品をインストールする前に、Marketing Platform を完全にインストールし、配置しておく必要があります。そうすることで、インストールする製品が構成プロパティおよびセキュリティーの役割を登録し、Marketing Platform の「構成」ページで構成プロパティの値を設定できるようにします。

一般に、連動させる予定の製品グループごとに、Marketing Platform を 1 度だけインストールする必要があります。ただし、Interact の場合、実稼働 Interact サーバー・グループごとに独自の Marketing Platform のインストールを用意するのがベスト・プラクティスです。

IBM Campaign の要件

Campaign のインストールは、それに依存する Campaign ファミリー製品である Interact、Contact Optimization、Distributed Marketing、および eMessage をインストールする前に行う必要があります。

知識要件

IBM EMM 製品をインストールするには、製品がインストールされる環境に関する十分な知識を持っているか、あるいはその知識を持っている人とともに作業を行う必要があります。これには、オペレーティング・システム、データベース、および Web アプリケーション・サーバーに関する知識が含まれます。

クライアント・マシン

クライアント・マシンは、以下の構成要件を満たしている必要があります。

- ブラウザーでページをキャッシュしない。Internet Explorer で、「ツール」>「インターネット オプション」>「全般」>「閲覧の履歴」>「設定」の順に選択し、アクセスするたびにブラウザがページの新しいバージョンの有無を確認するオプションを選択します。
- ポップアップ広告ウィンドウをブロックするソフトウェアがクライアント・マシンにインストールされていると、Campaign が適切に機能しないことがあります。最良の結果を得るために、Campaign を実行する間は、ポップアップ広告ウィンドウをブロックするソフトウェアを無効にしてください。

アクセス権限

与えられているネットワーク権限でこのガイドの手順を実行できること、および適切な権限でログインできることを確認してください。

適切な権限は次のとおりです。

- Web アプリケーション・サーバーの管理パスワード。
- 必要なすべてのデータベースに対する管理権限。
- 編集する必要があるすべてのファイルに対する書き込み権限。
- インストール・ディレクトリーやバックアップ・ディレクトリー (アップグレードを行う場合) など、ファイルを保存する必要があるすべてのディレクトリーに対する書き込み権限。
- インストーラーを実行するための適切な読み取り/書き込み/実行権限。

- Web アプリケーション・サーバーおよび IBM EMM コンポーネントを実行するために使用するオペレーティング・システム・アカウントには、関連するディレクトリーおよびサブディレクトリーに対する読み取りおよび書き込み権限が必要です。
- UNIX の場合、Campaign および Marketing Platform をインストールするユーザー・アカウントは、Campaign ユーザーと同じグループのメンバーでなければなりません。このユーザー・アカウントには有効なホーム・ディレクトリーが必要であり、そのディレクトリーに対する書き込み権限が必要です。
- UNIX の場合、IBM 製品のすべてのインストーラー・ファイルには全実行権限が必要です (例えば、rwxr-xr-x)。

アップグレードを行う場合、または複数のパーティションを構成する場合

アップグレードを行う場合は、アップグレードの準備に関するセクションを参照してください。

複数のパーティションを作成する計画の場合は、複数のパーティションの構成に関するセクションを参照してください。

第 2 章 IBM Interact データ・ソースの準備について

Interact に必要なデータ・ソースおよび JDBC 接続をセットアップする必要があります。インストール処理の後の箇所でシステム・テーブル・データベースに関する詳細が必要になるため、このセクションのステップを実行する際には、13 ページの『IBM Interact データベース情報のチェックリスト』を印刷して、それに記入してください。

ステップ: データベースまたはスキーマを作成する

1. データベース管理者と共に作業して、Interact に必要なデータベースまたはスキーマを作成します。

スキーマの作成を開始する前に、このセクションの残りの部分を必ず参照してください。そこには、作成する必要のあるデータベースまたはスキーマについての情報が記載されています。

2. 必要なデータベースやスキーマごとに、インストール処理の後の箇所でシステム・ユーザーに指定することになるアカウントを、データベース管理者が作成するようにします。

このアカウントには、少なくとも

CREATE、SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE、および DROP 権限が必要です。

3. データベースまたはスキーマとデータベース・アカウントとに関する情報を取得した後に、13 ページの『IBM Interact データベース情報のチェックリスト』を印刷して、それらの情報を記入します。この情報は、後にインストール処理で使用します。

Interact に必要なデータベースまたはスキーマ

このセクションを参照して、作成する必要のあるデータベースまたはスキーマの数を判別してください。Interact 設計環境では、Campaign システム・テーブルのあるデータベースまたはスキーマに追加されるためにここにはリストされていない、追加のテーブルが必要になります。

Interact ランタイム環境では、いくつかのデータベースが必要になることがあります。以下に簡潔な要約をリストします。

- Interact ランタイム・テーブルを入れるためのデータベースまたはスキーマを作成します。それぞれのサーバー・グループに、別個のデータベースまたはスキーマが必要です。
- ユーザー・プロファイル・テーブルを保持するための、データベース、スキーマ、またはビューを作成します。ユーザー・プロファイル・テーブルは、Campaign 顧客 (ユーザー) テーブルと同じデータベースに格納することができます。対話式チャネルごとに、別個のユーザー・プロファイル・テーブルのセットを持つことができます。

- テスト実行テーブルを保持するための、データベース、スキーマ、またはビューを作成します。テスト実行テーブルは、Campaign 顧客 (ユーザー) テーブルと同じデータベースに入れることができます。
- 組み込み学習を使用する場合、学習テーブルを保持するためのデータベースまたはスキーマを作成します。
- クロスセッション・レスポンス・トラッキングを使用する場合、Campaign コンタクト履歴テーブルのコピーを保持するためのデータベースまたはスキーマを作成します。または、コピーを作成する代わりに、実際の Campaign コンタクト履歴テーブルを使用することもできます。

ステップ: ODBC またはネイティブ接続を Campaign マシン上に作成する

Campaign サーバーがインストールされたマシンは、Interact 設計環境のテスト実行テーブルがあるデータベースとの通信が可能でなければなりません。これらのテーブルは、顧客 (ユーザー) のテーブルと同じである場合があります。その場合、接続は既に Campaign がインストールされたときに作成されています。

Interact 設計環境のテスト実行テーブルが顧客 (ユーザー) のテーブルとは異なる場合、以下のガイドラインを使用して、テスト実行テーブルがあるデータベースへの ODBC 接続またはネイティブ接続を作成します。

- UNIX 上のデータベースの場合: ODBC.ini ファイルに新しいネイティブ・データ・ソースを作成します。ネイティブ・データ・ソースを作成する手順は、データ・ソースのタイプおよび UNIX のバージョンによって異なります。特定の ODBC ドライバーのインストールおよび構成方法については、データ・ソースおよびオペレーティング・システムの文書を参照してください。
- Windows 上のデータベースの場合: 「コントロール パネル」の「管理ツール」> 「データ ソース (ODBC)」セクションで、新しい ODBC データ・ソースを作成します。

13 ページの『IBM Interact データベース情報のチェックリスト』に接続名を記録します。

ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する

Marketing Platform で必要な JDBC 接続用の正しい JAR ファイルを入手する必要があります。また、Marketing Platform の配置場所となる予定の Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに、このファイルの場所を追加する必要があります。

重要: IBM EMM 製品を配置する予定のすべての Web アプリケーション・サーバーで、この手順を実行します。

1. 「IBM Marketing Platform 推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件」の資料の説明に従って、IBM EMM でサポートされる最新のベンダー提供タイプ 4 JDBC ドライバーを入手します。

- Marketing Platform を配置する予定のサーバー上にこのドライバーが存在しない場合は、それを入手し、そのサーバーでアンパックします。スペースを含まないパスでドライバーをアンパックします。
- データ・ソース・クライアントがインストールされているサーバーからドライバーを入手する場合は、IBM がサポートしている最新のバージョンであることを確認してください。

以下の表は、IBM EMM システム・テーブルでサポートされるデータベース用のドライバー・ファイルの名前をリストしています。

データベース	ファイル
Oracle	ojdbc6.jar
DB2®	db2jcc.jar db2jcc_license_cu.jar - V9.5 以上では不要
SQL Server	バージョン 3.0 以上の SQL Server ドライバーを使用する必要があります。使用するこのドライバーの正確なバージョンについては、「IBM EMM 推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件」を参照してください。 sqljdbc.jar

2. Marketing Platform の配置場所となる予定の Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに、ファイル名を含むドライバーの絶対パスを追加します。
 - サポートされるすべてのバージョンの WebLogic で、環境変数が構成される `WebLogic_domain_directory/bin` ディレクトリーの `setDomainEnv` スクリプトにクラスパスを設定します。正しいドライバーを Web アプリケーション・サーバーで確実に使用するためには、ドライバー項目をクラスパス・リストの最初の項目 (既存のすべての値より前) にする必要があります。以下に例を示します。

UNIX

```
CLASSPATH="/home/oracle/product/11.0.0/jdbc/lib/ojdbc6.jar:
${PRE_CLASSPATH}${CLASSPATHSEP}${WEBLOGIC_CLASSPATH}
${CLASSPATHSEP}${POST_CLASSPATH}${CLASSPATHSEP}${WLP_POST_CLASSPATH}"
export CLASSPATH
```

Windows

```
set CLASSPATH=c:\oracle\jdbc\lib\ojdbc6.jar;%PRE_CLASSPATH%;
%WEBLOGIC_CLASSPATH%;%POST_CLASSPATH%;%WLP_POST_CLASSPATH%
```

- サポートされるすべてのバージョンの WebSphere では、次のステップで Marketing Platform の JDBC プロバイダーをセットアップするときに、クラスパスを設定します。
3. インストーラーを実行するときに、このパスを入力する必要があるため、Marketing Platform データベース情報チェックリストにこのデータベース・ドライバーのクラスパスを書き留めます。
 4. Web アプリケーション・サーバーを再始動して、行った変更を有効にしてください。

始動時にコンソール・ログをモニターして、クラスパスにデータベース・ドライバーのパスが含まれていることを確認してください。

ステップ: JDBC 接続を Web アプリケーション・サーバーに作成する

次の表にリストされているように、Campaign および Interact が配置される各 Web アプリケーション・サーバーで、JDBC 接続を作成する必要があります。

リストには、推奨される JNDI 名も示されています。これらの名前はその接続を参照する構成プロパティのデフォルト値と一致するので、これらの名前を使用することによって構成が簡単になります。

配置される Web アプリケーション	JDBC 接続が必要となるデータベース
Campaign	<p>Campaign が配置される Web アプリケーション・サーバーで、以下のテーブルを持つデータベースに対して JDBC 接続を作成します。</p> <ul style="list-style-type: none">• Interact ランタイム・テーブル <p>JNDI 名: InteractRTDS</p> <ul style="list-style-type: none">• Interact テスト実行テーブル (顧客 (ユーザー) テーブルと同じである場合もある) <p>JNDI 名: testRunDataSource</p>

配置される Web アプリケーション	JDBC 接続が必要となるデータベース
<p>Interact ランタイム (これは通常、Campaign とは別の JVM に配置されます)</p>	<p>Interact ランタイムが配置される Web アプリケーション・サーバーで、以下のテーブルを持つデータベースに対して JDBC 接続を作成します。特に明記されていない限り、すべての JNDI 名が推奨されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Interact ランタイム・テーブル JNDI 名: InteractRTDS • Interact プロファイル・テーブル JNDI 名: prodUserDataSource • Interact テスト実行テーブル (テスト実行サーバー・グループにのみ必要) JNDI 名: testRunDataSource • Interact 学習テーブル (組み込み学習を使用する場合) JNDI 名: InteractLearningDS • Campaign コンタクトおよびレスポンス履歴テーブル (クロスセッション・レスポンス・トラッキングを使用している場合) JNDI 名: contactAndResponseHistoryDataSource • Marketing Platform システム・テーブル JNDI 名: UnicaPlatformDS <p>重要: これは Platform システム・テーブル・データベースに接続するために必要な JNDI 名です。</p> <p>この JDBC 接続をセットアップする必要があるのは、Marketing Platform が現在配置されていない Web アプリケーション・サーバーに Interact ランタイムをインストールするときだけです。Marketing Platform が同じ Web アプリケーション・サーバーに配置されている場合、この JDBC 接続は既に定義されています。</p>

13 ページの『IBM Interact データベース情報のチェックリスト』で使用した JNDI 名を記録します。

JDBC 接続の作成のための情報

JDBC 接続を作成するとき、このセクションを参照すると、入力のないいくつかの値を決めるために役立ちます。

注: データベースのデフォルト・ポート設定を使用しない場合は、必ずそれを適切な値に変更するようにしてください。

ここに示す情報は、Web アプリケーション・サーバーに必要な情報をすべては反映していません。このセクションで明示的な指示が与えられていない場合には、デフ

オルト値を受け入れることができます。より広範囲なヘルプが必要な場合には、アプリケーション・サーバーの文書を参照してください。

WebLogic

アプリケーション・サーバーが WebLogic である場合に、以下の値を使用します。

SQLServer

- データベース・ドライバー: Microsoft MS SQL Server Driver (タイプ 4) バージョン: 2008、2008R2
- デフォルト・ポート: 1433
- ドライバー・クラス: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
- ドライバー URL: jdbc:sqlserver://
<your_db_host>:<your_db_port>;databaseName=<your_db_name>
- プロパティ: user=<your_db_user_name> を追加

Oracle 11 および 11g

- ドライバー: その他
- デフォルト・ポート: 1521
- ドライバー・クラス: oracle.jdbc.OracleDriver
- ドライバー URL:
jdbc:oracle:thin:@<your_db_host>:<your_db_port>:<your_db_service_name>

上記のフォーマットを使用してドライバー URL を入力してください。IBM EMM アプリケーションでは、JDBC 接続に対する Oracle の RAC (Real Application Cluster) フォーマットの使用は許可されていません。

- プロパティ: user=<your_db_user_name> を追加

DB2

- ドライバー: その他
- デフォルト・ポート: 50000
- ドライバー・クラス: com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
- ドライバー URL: jdbc:db2://<your_db_host>:<your_db_port>/<your_db_name>
- プロパティ: user=<your_db_user_name> を追加

WebSphere

アプリケーション・サーバーが WebSphere である場合に、以下の値を使用します。

SQLServer

- ドライバー: 該当なし
- デフォルト・ポート: 1433
- ドライバー・クラス:
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnectionPoolDataSource
- ドライバー URL: 該当なし

「データベース・タイプ」フィールドで、「ユーザー定義 (User-defined)」を選択します。

JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースを作成した後に、データ・ソースのカスタム・プロパティに移動して、プロパティを次のように追加および変更します。

- serverName=<your_SQL_server_name>
- portNumber =<SQL_Server_Port_Number>
- databaseName=<your_database_name>
- enable2Phase = false

Oracle 11 および 11g

- ドライバー: Oracle JDBC ドライバー
- デフォルト・ポート: 1521
- ドライバー・クラス: oracle.jdbc.OracleDriver
- ドライバー URL:
jdbc:oracle:thin:@<your_db_host>:<your_db_port>:<your_db_service_name>

上記のフォーマットを使用してドライバー URL を入力してください。IBM EMM アプリケーションでは、JDBC 接続に対する Oracle の RAC (Real Application Cluster) フォーマットの使用は許可されていません。

DB2

- ドライバー: DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー
- デフォルト・ポート: 50000
- ドライバー・クラス: com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
- ドライバー URL: jdbc:db2://<your_db_host>:<your_db_port>/<your_db_name>

IBM Interact データベース情報のチェックリスト

注: Interact データ・ソースのタイプはすべて同じでなければなりません。例えば、Campaign システム・テーブルが Oracle データベース内にある場合は、他のすべてのデータベースも Oracle 形式でなければなりません。

ランタイム・テーブル

ランタイム・テーブルを含む複数のデータベースが存在することがあります。各ランタイム環境についての情報を記入してください。

データベース・スキーマ 1	
JNDI 名 1	
データベース・スキーマ 2	
JNDI 名 2	
データベース・スキーマ 3	
JNDI 名 3	

コンタクト・レスポンス履歴テーブル

クロスセッション・トラッキングが実装されているときにのみ使用されます。これらのテーブルは、Campaign コンタクト・レスポンス履歴テーブルと同じであることも、別のデータベース・サーバーまたはスキーマ内のものであることもあります。

データベース・スキーマ	
JNDI 名	

学習テーブル

これらは任意指定です。

データベース・スキーマ	
JNDI 名	

ユーザー・プロフィール・テーブル

これらは顧客 (ユーザー) のテーブル内のものであることがあります。

データベース・スキーマ	
JNDI 名	

テスト実行テーブル

これらは顧客 (ユーザー) のテーブル内のものであることがあります。

データベース・スキーマ	
DSN (ODBC またはネイティブ接続名)	
JNDI 名	

第 3 章 ステップ: IBM インストーラーを入手する

DVD を入手するか、または IBM からソフトウェアをダウンロードします。

- IBM インストーラー
- Interact インストーラー

IBM レポート作成機能を使用する予定がある場合、そのインストール方法について「*IBM Marketing Platform インストール・ガイド*」を参照してください。

このインストール・ガイドでは、Campaign が設計環境のために、そして少なくとも 1 つのインスタンスの Marketing Platform が各ランタイム環境のために、インストールされて構成されていることを想定しています。

UNIX タイプのシステムでの権限の設定

UNIX タイプのシステムで、インストール・ファイルに完全な実行権限 (rwxr-xr-x) があることを確認してください。

正しいインストーラー・ファイルの選択

IBM EMM インストール・ファイルは、製品のバージョンと、使用が想定されているオペレーティング・システムとに基づいて名前が付けられています。ただし、オペレーティング・システムに固有ではない、コンソール・モードで実行される UNIX ファイルの場合は例外です。UNIX では、インストール・モードが X Window またはコンソールのどちらであるかに応じて異なるファイルが使用されます。32 ビットと 64 ビットのオペレーティング・システムで異なるインストーラーが存在する場合は、これらの数字もファイル名に含まれます。ビット数が含まれていない場合、そのインストーラーは 32 ビットおよび 64 ビットの両方のオペレーティング・システムで使用できます。

ここに、インストール環境に基づいて選択できるインストーラーの例をいくつか示します。

Windows に GUI またはコンソール・モードを使用してインストールする予定の場合 — *ProductN.N.N.N_win.exe* は、バージョンが N.N.N.N で、Windows 32 ビットまたは 64 ビットのオペレーティング・システムにインストールするためのものです。

Solaris に X-windows モードを使用してインストールする場合 — *ProductN.N.N.N_solaris64.bin* は、バージョンが N.N.N.N で、Solaris 64 ビット・オペレーティング・システムにインストールするためのものです。

UNIX にコンソール・モードを使用してインストールする予定の場合 — *ProductN.N.N.N.sh* は、バージョンが N.N.N.N で、すべての UNIX オペレーティング・システムにインストールできます。

インストール・ファイルのコピー (DVD のみ)

IBM インストール・ファイルを DVD で受け取った場合、またはダウンロードした ISO イメージ・ファイルから DVD を作成した場合には、インストーラーを実行する前に、その内容を IBM 製品をインストールするシステムで使用可能な書き込み可能ディレクトリーにコピーする必要があります。

注: インストール・ファイルを格納する場所について詳しくは、『IBM EMM インストーラーの機能』を参照してください。

IBM EMM インストーラーの機能

IBM EMM インストーラーの基本機能を十分に理解していない場合は、このセクションをお読みください。

インストーラー・ファイルの単一ディレクトリー要件

IBM EMM エンタープライズ製品をインストールするとき、複数のインストーラーを組み合わせ使用します。

- マスター・インストーラー (ファイル名に IBM_EMM_Installer が含まれる)
- 製品固有のインストーラー (すべてにファイル名の一部として製品名が含まれる)

IBM EMM 製品をインストールするには、マスター・インストーラーと製品インストーラーとを同じディレクトリーに配置する必要があります。マスター・インストーラーを実行すると、ディレクトリー内の製品インストール・ファイルが検出されます。その後、インストールする製品を選択できます。

ディレクトリー内にマスター・インストーラーと共に複数のバージョンの製品インストーラーがある場合、マスター・インストーラーは常に製品の最新バージョンを、インストール・ウィザードの IBM EMM 製品画面に表示します。

パッチのインストール

IBM EMM 製品の新規インストールを実行した直後に、パッチのインストールも計画している場合があります。その場合、基本バージョンおよびマスター・インストーラーのあるディレクトリーにパッチ・インストーラーを置きます。インストーラーを実行するときに、基本バージョンとパッチの両方を選択できます。すると、インストーラーはそれら両方を正しい順序でインストールします。

製品のインストール

このセクションでは、IBM EMM 製品のインストール方法について説明します。

製品インストール・ディレクトリーの選択

ネットワークにアクセス可能な任意のシステムの、任意のディレクトリーにインストールできます。パスを入力するか、パスを参照して選択することにより、インストール・ディレクトリーを指定できます。

パスの前にピリオドを 1 つ入力することにより、インストーラーを実行するディレクトリーとの相対位置でパスを指定できます。

指定したディレクトリーが存在しない場合、ログインに適切な権限があれば、インストーラーがそのディレクトリーを作成します。

IBM EMM インストールのデフォルトの最上位ディレクトリーは、/IBM/EMM (UNIX) または C:\IBM\EMM (Windows) です。その後、製品インストーラーは EMM ディレクトリーの下の子の個々のサブディレクトリーに製品ファイルをインストールします。

インストール・タイプ

IBM EMM インストーラーは、以下のタイプのインストールを実行します。

- **新規インストール:** インストーラーを実行して、IBM EMM 製品がまだインストールされたことのないディレクトリーを選択すると、インストーラーは自動的に新規インストールを実行します。
- **アップグレード・インストール:** インストーラーを実行して、以前のバージョンの IBM EMM 製品がインストールされているディレクトリーを選択すると、インストーラーは自動的にアップグレード・インストールを実行します。インストーラーが自動的にデータベースを更新する製品の場合は、アップグレード・インストールにより新しいテーブルが追加されますが、既存のテーブル内のデータは上書きされません。

インストーラーが自動的にデータベースを更新する製品の場合は、インストーラーはデータベース内にテーブルが存在する場合にテーブルを作成しないので、アップグレードの際にエラーが生じることがあります。これらのエラーは、無視しても安全です。詳しくは、アップグレードに関する章を参照してください。

- **再インストール:** インストーラーの実行時に、同じバージョンの IBM EMM 製品がインストールされているディレクトリーを選択した場合、インストーラーは既存のインストールを上書きします。既存のデータを保持するには、再インストールする前に、インストール・ディレクトリーとシステム・テーブル・データベースをバックアップしておきます。

通常、再インストールは推奨されません。

インストール・モード

IBM EMM インストーラーは、以下のモードで実行できます。

- **コンソール (コマンド・ライン) モード**

コンソール・モードでは、オプションは番号付きリストで表示されます。必要なオプションを選択するには、番号を入力します。番号を入力しないで Enter キーを押すと、インストーラーはデフォルト・オプションを使用します。デフォルト・オプションは、以下のいずれかの記号によって表されます。

--> この記号が表示されている場合にオプションを選択するには、対象のオプションの番号を入力してから Enter を押します。

[X] この記号は、リストにあるオプションの 1 つ、複数、またはすべてを選択できることを示しています。[X] 記号が隣にあるオプションの番号を入力して Enter

を押すと、そのオプションがクリア、つまり選択解除されます。現在選択されていない (その横に [] がある) オプションの番号を入力して Enter キーを押すと、そのオプションが選択されます。

複数のオプションを選択解除または選択するには、番号をコンマ区切りリストの形式で入力します。

- Windows GUI または UNIX X-windows モード
- ユーザーとの対話が不要な、無人つまりサイレント・モード

無人モードは、クラスター環境をセットアップするときなど、IBM EMM 製品を複数回インストールするために使用できます。詳しくは、『無人モードを使用して複数回インストールする』を参照してください。

無人モードを使用して複数回インストールする

IBM EMM 製品を複数回インストールする必要がある場合 (例えば、クラスター環境をセットアップする場合など)、ユーザー入力を必要としない無人モードで IBM EMM インストーラーを実行できます。

応答ファイルについて

無人モード (サイレント・モードとも呼ばれる) では、コンソールまたは GUI モードを使用するときにユーザーがインストール・プロンプトに入力するものと同じ情報を提供する、ファイルまたはファイルのセットが必要となります。これらのファイルは応答ファイルと呼ばれます。

以下のいずれかのオプションを使用して、応答ファイルを作成できます。

- サンプルの応答ファイルをテンプレートとして使用して、応答ファイルを直接作成できます。サンプル・ファイルは、ResponseFiles という名前の圧縮アーカイブに入った状態で、製品インストーラーに含まれています。サンプル応答ファイルの名前は、次のとおりです。
 - IBM EMM マスター・インストーラー - `installer.properties`
 - 製品インストーラー - `installer_` の後に製品名のイニシャルとバージョンの番号が付きます。例えば、Campaign インストーラーの応答ファイルの名前は `installer_ucN.N.N.N.properties` となります。
 - 製品レポート・パック・インストーラー - `installer_` の後にレポート・パッケのイニシャル、製品名、およびバージョンの番号が付きます。例えば、Campaign レポート・パック・インストーラーの応答ファイルの名前は `installer_urpcN.N.N.N.properties` となります。

必要に応じてサンプル・ファイルを編集し、インストーラーと同じディレクトリに置きます。

- また、無人モードでの実行をセットアップする前に、Windows GUI または UNIX X-windows モード、またはコンソール・モードでインストーラーを実行して、応答ファイルを作成することを選択できます。

IBM EMM マスター・インストーラーは 1 つのファイルを作成し、インストールする各 IBM EMM 製品も 1 つ以上のファイルを作成します。

インストーラーを実行するときに作成される応答ファイルには `.properties` という拡張子が付いており (例えば、`installer_productversion.properties`)、IBM EMM インストーラー自体のファイルには `installer.properties` という名前が付いています。インストーラーは、指定されたディレクトリーにこれらのファイルを作成します。

重要: セキュリティー上の理由で、インストーラーはデータベース・パスワードを応答ファイルに記録しません。無人モード用の応答ファイルを作成するときは、各応答ファイルを編集してデータベース・パスワードを入力する必要があります。各応答ファイルを開いて、`PASSWORD` を検索し、それらの編集を行う必要のある個所を見つけてください。

インストーラーが応答ファイルを検索する場所

インストーラーを無人モードで実行すると、以下の方法で応答ファイルが検索されます。

- 最初に、インストーラーはインストール・ディレクトリーを検索します。
- 次に、インストーラーはインストールを実行しているユーザーのホーム・ディレクトリーを検索します。

すべての応答ファイルは同じディレクトリーにある必要があります。コマンド・ラインに引数を追加することによって、応答ファイルを読み取るためのパスを変更できます。以下に例を示します。

```
-DUNICA_REPLAY_READ_DIR="myDirPath" -f myDirPath/installer.properties
```

アンインストールする際の無人モードによる影響

無人モードを使ってインストールされた製品をアンインストールする際、アンインストールは無人モードで実行されます (ユーザー対話のためのダイアログは表示されません)。

無人モードとアップグレード

アップグレードするとき、応答ファイルが以前に作成されていて無人モードで実行する場合は、インストーラーは以前に設定されたインストール・ディレクトリーを使用します。応答ファイルが存在しないときに無人モードを使用してアップグレードする場合は、最初のインストールでは手動でインストーラーを実行して応答ファイルを作成し、インストール・ウィザードで必ず現行のインストール・ディレクトリーを選択します。

IBM Interact コンポーネントのインストール先

Interact 設計環境は、Campaign と共にインストールする必要があります。パフォーマンスを最高にするために、IBM は、ランタイム・サーバーを他の IBM EMM 製品がインストールされていない専用のマシンにインストールすることを推奨します。

重要: サーバー・グループごとに、Marketing Platform を完全にインストールして配置する必要があります。複数の Interact サーバー・グループをインストールする場合は、各ランタイム・サーバー・グループに Marketing Platform を完全にインストールして配置する必要があります。

次の表は、Interact をインストールする際に選択可能なコンポーネントを説明しています。

コンポーネント	説明
Interact ランタイム環境	Interact ランタイム・サーバー。リアルタイム・データに基づくオファーを提供するために、Interact ランタイム・サーバーを Web サイトなどのタッチポイントに組み込みます。 複数のランタイム・サーバーを環境にインストールして、それらをサーバー・グループに編成できます。各サーバー・グループには、Campaign の Marketing Platform や他のサーバー・グループとは別個の、Marketing Platform の 1 つのインスタンスが必要です。
Interact 設計環境	Interact の設計環境。設計環境は、Campaign と同じマシンにインストールする必要があります。1 つの設計環境だけをインストールする必要があります。

IBM Interact Report Package コンポーネントのインストール先

Interact のレポート・パッケージには、次に示す 2 つのインストール・コンポーネントが含まれています。

- レポート・スキーマ (Marketing Platform システムにインストールされる)。
- IBM Cognos® パッケージ (IBM Cognos システムにインストールされる)。

以下の表は、Interact のレポート・パッケージをインストールする際に選択できるコンポーネントを説明しています。

コンポーネント	説明
IBM Interact レポート・スキーマ (IBM EMM システムにインストールされる)	Interact レポート・スキーマは、レポートで使用できる 3 つの Interact データ・ソースすべてから、対話式チャンネルに基づくキャンペーン、オファー、およびセル・データを作成します。
IBM Interact の IBM Cognos パッケージ (IBM Cognos システムにインストールされる)	IBM Cognos パッケージには、Interact データベース表用のレポート・メタデータ・モデルと、キャンペーン、オファー、およびセルのパフォーマンスの追跡に使用できるサンプル・レポートのセットが含まれます。

複数の Interact ランタイム・サーバーについて

単一のサーバー・グループ内にあるすべての Interact ランタイム・サーバーは、ランタイム・テーブル、プロファイル・テーブル、および学習テーブルで同じスキーマを使用する必要があります。

最高のパフォーマンスを得るために、それぞれの実稼働 Interact サーバー・グループを専用の Marketing Platform のインスタンスと共にインストールします。ただし、これは厳格な要件ではありません。一般的な規則として、次の例で示すように、同じサーバー・グループ内の Interact ランタイム・サーバーは、Marketing Platform の同じインスタンスを使用する必要があります。

1. Marketing Platform および Interact ランタイムを最初のサーバーにインストールして構成し、それらが適正に構成されて作動していることを確認します。
2. Interact ランタイムだけを 2 番目のサーバーにインストールします。最初のサーバーで Marketing Platform インストールに使用したものと同一 Marketing Platform データ・ソースの詳細と資格情報を提供します。これにより、2 番目の Interact サーバーが Marketing Platform の同じインスタンスを使用するように登録されます。
3. 2 番目のサーバーに、Interact ランタイム .WAR ファイルを配置します。
4. 2 番目のサーバーに Interact ランタイムが配置されて、正常に実行されていることを確認します。
5. Interact 設計時構成の中の単一サーバー・グループに、最初の Interact ランタイム・サーバーと 2 番目のサーバーの URL を使用します。

要求されてはいませんが、Interact ランタイム・サーバーごとに Marketing Platform の固有インスタンスをインストールすることや、ランタイム・サーバーのサブセットをサポートする Marketing Platform の複数のインスタンスをインストールすることもできます。例えば、サーバー・グループ内に 15 のランタイム・サーバーが含まれる場合、合計で 3 つの Marketing Platform のインスタンスについて、それぞれ 5 つのランタイム・サーバーが 1 つの Marketing Platform のインスタンスにレポートを送るようにします。

複数の Marketing Platform のインスタンスを持つことを計画している場合は、所定のサーバー・グループで、汎用の Interact 構成が Marketing Platform のすべてのインスタンスと適合する必要があります。各サーバー・グループで、すべての Marketing Platform のインスタンスに対して、同じランタイム・テーブル、プロファイル・テーブル、および学習テーブルを定義する必要があります。同じサーバー・グループに属するすべての Interact サーバーは、同じユーザー資格情報を共有する必要があります。Interact サーバーごとに別個の Marketing Platform インスタンスがある場合、それぞれに同じユーザーおよびパスワードを作成する必要があります。

テスト環境をインストールする場合、複数の Interact ランタイム・サーバーが同じマシン上にあるときには、以下のようにします。

- 各 Interact ランタイム・サーバーのインスタンスは、別個の Web アプリケーション・インスタンス内になければなりません。
- 同じマシン上で稼働している Interact サーバー用に JMX モニターを構成する場合、各 Interact ランタイム・サーバーの JMX モニターを構成して、異なるポートとインスタンス名が使用されるようにする必要があります。Web アプリケーション・サーバーの開始スクリプトで JAVA_OPTIONS を編集して、次のオプションを追加します。

すべての IBM EMM 製品のインストールに必要な情報

このセクションに説明されているように、必要な情報を収集します。

Marketing Platform 情報

各 IBM EMM 製品のインストール・ウィザードは、製品を登録するために、Marketing Platform システム・テーブル・データベースと通信可能でなければなりません。

インストーラーを実行するたびに、Marketing Platform システム・テーブル・データベースのための以下のデータベース接続情報を入力する必要があります。

- データベース・タイプ。
- データベース・ホスト名。
- データベース・ポート。
- データベース名またはスキーマ ID。
- データベース・アカウントのユーザー名およびパスワード。

この情報は、データベースまたはスキーマを作成したときに取得したものです。

Web コンポーネント情報

Web アプリケーション・サーバーに配置した Web コンポーネントを持つすべての IBM EMM 製品で、以下の情報を取得する必要があります。

- Web アプリケーション・サーバーがインストールされるシステムの名前。セットアップする IBM EMM 環境に応じて、1 つまたは複数の名前となります。
- アプリケーション・サーバーが listen するポート。SSL を実装する予定の場合、SSL ポートを取得します。
- 配置システムのネットワーク・ドメイン。例えば、mycompany.com。

ステップ: IBM EMM インストーラーを実行する

IBM EMM インストーラーを実行する前に、以下の前提条件を満たしていることを確認してください。

- IBM EMM インストーラーと、インストール予定の製品のインストーラーをダウンロードした。IBM EMM および製品のインストーラーは、どちらも同じディレクトリになければなりません。
- 『すべての IBM EMM 製品のインストールに必要な情報』に説明されているように、収集した情報が使用可能になっている。

他の IBM EMM 製品がインストールされているシステムでインストーラーを再実行する場合、それらの他の製品を再インストールしないでください。

インストーラーの詳細について、またはウィザードに情報を入力するための支援が必要な場合には、このセクション内の他のトピックを参照してください。

ここで説明されている方法で IBM EMM インストーラーを実行し、ウィザードの指示に従います。

- GUI または X Window System モード

IBM_EMM_Installer ファイルを実行します。UNIX で、.bin ファイルを使用します。

- コンソール・モード

コマンド・プロンプトを開き、IBM ソフトウェアをダウンロードしたディレクトリーから、以下のようにして IBM_EMM_Installer 実行可能ファイルを実行します。

Windows では、IBM_EMM_Installer 実行可能ファイルに `-i console` を指定して実行します。例えば、`IBM_EMM_Installer_N.N.N.N_OS -i console` とします。

UNIX では、IBM_EMM_Installer.sh ファイルをスイッチなしで実行します。

注: Solaris では、Bash シェルからインストーラーを実行する必要があります。

- 無人モード

コマンド・プロンプトを開き、IBM EMM ソフトウェアをダウンロードしたディレクトリーから、IBM_EMM_Installer 実行可能ファイルに `-i silent` を指定して実行します。UNIX で、.bin ファイルを使用します。例えば、インストーラーと同じディレクトリーにある応答ファイルを指定するには、次のようにします。

```
IBM_EMM_Installer_N.N.N.N_OS -i silent
```

異なるディレクトリーにある応答ファイルを指定するには、`-f filepath/filename` を使用します。絶対パスを使用してください。以下に例を示します。

```
IBM_EMM_Installer_N.N.N.N_OS -i silent -f filepath/filename
```

無人モードについて詳しくは、18 ページの『無人モードを使用して複数回インストールする』を参照してください。

インストール・ウィザード内の移動

インストーラーが GUI モードで実行されているときは、「進む」、「戻る」、「キャンセル」、および「完了」ボタンを使用して移動します。

インストーラーがコンソール・モードで実行されているときは、ウィザードの各画面のヘルプ・テキストで説明されているように、GUI モードでのボタンに対応する番号を入力して移動します。コンソール・モードでは、追加の再表示コマンドも使用可能です。

コンソール・モードでは、プロンプト行の末尾に 1 つの数字または文字が大括弧で囲まれて表示されます。これは、何も入力しないで **Enter** キーを押した場合に出されるデフォルトのコマンドです。 **back** と入力して直前の画面に戻ることや、**quit** と入力してインストールをキャンセルすることもできます。

IBM サイト ID

インストーラーは、IBM サイト ID の入力を求めるプロンプトを出すことがあります。IBM サイト ID は、IBM Welcome レター、Tech Support Welcome レター、Proof of Entitlement (ライセンス証書) レター、またはソフトウェアの購入時に送られる通信物に記載されています。

IBM は、お客様が弊社の製品をどのようにご利用になっているかをより良く理解し、カスタマー・サポートを改善するために、ソフトウェアによって提供されるデータを使用する場合があります。収集されるデータには、個人を識別する情報は含まれていません。

こうした情報が収集されることを望まない場合には、Marketing Platform をインストールした後に、Marketing Platform に管理者権限のあるユーザーとしてログオンします。「設定」>「構成」ページに移動して、「プラットフォーム」カテゴリーの下の「ページのタグ付けを無効にする (Disable Page Tagging)」プロパティを **True** に設定します。

インストーラーの実行後に EAR ファイルを作成する方法

IBM EMM 製品をインストールした後に EAR ファイルを作成する場合は、この手順を使用します。これは、EAR ファイルで別の製品の組み合わせを指定することに決めた場合などに行うことができます。

複数の WAR ファイルが、単一のディレクトリーにある必要があります。インストーラーは、コマンド・ラインからコンソール・モードで実行します。

1. コンソール・モードでインストーラーを初めて実行するときには、インストールする製品ごとに、インストーラーの `.properties` ファイルのバックアップ・コピーを作成します。

各 IBM 製品インストーラーにより、`.properties` 拡張子を持つ 1 つ以上の応答ファイルが作成されます。これらのファイルは、インストーラーと同じディレクトリーにあります。`.properties` という拡張子を持つすべてのファイル (`installer_productversion.properties` ファイル、および `installer.properties` という名前の IBM インストーラー自体のファイルを含む) を必ずバックアップします。

インストーラーを無人モードで実行する予定の場合、オリジナルの `.properties` ファイルは、インストーラーが無人モードで実行されるときに消去されるのでバックアップを作成しておく必要があります。EAR ファイルを作成するには、インストーラーが初期インストールの際に `.properties` ファイルに書き込むための情報が必要です。

2. コマンド・ウィンドウを開き、ディレクトリーをインストーラーが含まれるディレクトリーに変更します。
3. インストーラーの実行可能ファイルに次のオプションを指定して実行します。

```
-DUNICA_GOTO_CREATEEARFILE=TRUE
```

UNIX タイプのシステムでは、`.sh` ファイルではなく `.bin` ファイルを実行します。

インストーラー・ウィザードが実行されます。

4. ウィザードの指示に従ってください。
5. 追加の EAR ファイルを作成する前に、`.properties` ファイル (複数の場合もある) を、初めてコンソール・モードで実行する前に作成したバックアップ・ファイルで上書きします。

第 4 章 IBM Interact の配置前の構成について

Interact を配置する前に、このセクションで説明されている作業を実行する必要があります。

設計環境にもランタイム環境にも、配置前の構成作業はありません。

ステップ: Interact システム・テーブルを作成してデータを追加する

データベース・クライアントを使用して、Interact SQL スクリプトを該当のデータベースまたはスキーマに対して実行し、Interact ランタイム環境、設計環境、学習、ユーザー・プロファイル、およびコンタクトとレスポンスのトラッキング・データ・ソースを作成して、それらにデータを追加します。

設計環境のテーブル

Campaign でInteract 設計環境を使用可能にする前に、いくつかのテーブルを Campaign システム・テーブル・データベースに追加する必要があります。

以下の表は、設計環境のテーブルを手動で作成してデータを追加するために使用できる SQL スクリプトをリストしています。

SQL スクリプトは、Interact 設計環境の <Interact_HOME>/interactDT/ddl ディレクトリにあります。

Campaign システム・テーブルが Unicode 用に構成されている場合は、Interact 設計環境の <Interact_HOME>/interactDT/ddl/unicode ディレクトリにある適切なスクリプトを使用します。設計環境のテーブルにデータを追加するために使用される aci_populate_systab スクリプトに相当する Unicode のスクリプトはありません。

表 1. 設計時テーブルを作成するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	aci_systab_db2.sql Campaign システム・テーブルがあるユーザー・テーブル・スペースおよびシステム一時テーブル・スペースには、それぞれ 32 K 以上のページ・サイズが必要です。
Microsoft SQL Server	aci_systab_sqlsvr.sql
Oracle	aci_systab_ora.sql

表 2. 設計時テーブルにデータを追加するためのスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	aci_populate_systab_db2.sql

表 2. 設計時テーブルにデータを追加するためのスクリプト (続き)

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
Microsoft SQL Server	aci_populate_systab_sqlsvr.sql
Oracle	aci_populate_systab_ora.sql

ランタイム環境のテーブル

以下の表は、Interact ランタイム・テーブルを作成してデータを追加するために使用できる SQL スクリプトをリストしています。

SQL スクリプトは、Interact インストール環境の <Interact_HOME>/ddl ディレクトリにあります。

Interact ランタイム・テーブルが Unicode 用に構成されている場合は、<Interact_HOME>/ddl/Unicode ディレクトリにある適切なスクリプトを使用してランタイム・テーブルを作成します。ランタイム・テーブルにデータを追加するために使用される aci_populate_runtab スクリプトに相当する Unicode のスクリプトはありません。

これらのスクリプトは、サーバー・グループのデータ・ソースごとに 1 回実行する必要があります。

表 3. ランタイム環境のテーブルを作成するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	aci_runtab_db2.sql Interact ランタイム環境テーブルがあるユーザー・テーブル・スペースおよびシステム一時テーブル・スペースには、それぞれ 32 K 以上のページ・サイズが必要です。
Microsoft SQL Server	aci_runtab_sqlsvr.sql
Oracle	aci_runtab_ora.sql

表 4. ランタイム環境のテーブルにデータを追加するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	aci_populate_runtab_db2.sql このスクリプトを実行するときは、次のコマンドを使用する必要があります。db2 +c -td@ -vf aci_populate_runtab_db2.sql
Microsoft SQL Server	aci_populate_runtab_sqlsvr.sql
Oracle	aci_populate_runtab_ora.sql

オプション機能のためのテーブル

以下の表は、学習、グローバル・オファー、スコア・オーバーライド、コンタクトおよびレスポンス履歴のトラッキングなど、Interact 機能のテーブルを作成してデータを追加するために使用できる SQL スクリプトをリストしています。

学習

これらすべての SQL スクリプトは、<Interact_HOME>/ddl ディレクトリーにあります。

注: 組み込み学習モジュールでは、Interact ランタイム環境のテーブルとは別個のデータ・ソースが必要です。組み込み学習モジュールを使用する場合、すべての学習データを保持するためのデータ・ソースを作成する必要があります。この別個のデータ・ソースは、すべてのサーバー・グループと通信できます。つまり、異なるタッチポイントから同時に学習できます。

Interact ランタイム・テーブルが Unicode 用に構成されている場合は、<Interact_HOME>/ddl/Unicode ディレクトリーにある適切なスクリプトを使用して学習テーブルを作成します。

表 5. 学習テーブルのスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	aci_lrntab_db2.sql
Microsoft SQL Server	aci_lrntab_sqlsvr.sql
Oracle	aci_lrntab_ora.sql

コンタクトおよびレスポンス履歴

以下の表は、クロスセッション・レスポンス・トラッキングまたは拡張学習機能を使用している場合に、コンタクト履歴テーブルに対して実行する必要のある SQL スクリプトをリストしています。

すべての SQL スクリプトは、Interact インストール環境のディレクトリーにあります。

注: コンタクトおよびレスポンス履歴機能を使用するには、Interact ランタイム環境のテーブルとは別個のデータ・ソースが必要です。コンタクトおよびレスポンス履歴を使用する場合、コンタクトおよびレスポンス履歴のデータを参照するためのデータ・ソースを作成する必要があります。この別個のデータ・ソースは、すべてのサーバー・グループと通信できます。

コンタクト履歴テーブルが Unicode 用に構成されている場合は、標準スクリプトと同じ場所の Unicode ディレクトリーにある適切なスクリプトを使用して、学習テーブルを作成します。

表 6. コンタクト履歴テーブルのスキ립ト

データ・ソース・ タイプ	スキ립ト名
IBM DB2	<Interact_HOME>/ddl/aci_crhtab_db2.sql <Interact_HOME>/interactDT/ddl/aci_features/ aci_lrnfeature_db2.sql
Microsoft SQL Server	<Interact_HOME>/ddl/aci_crhtab_sqlsvr.sql <Interact_HOME>/interactDT/ddl/aci_lrnfeature_sqlsvr.sql
Oracle	<Interact_HOME>/ddl/aci_crhtab_ora.sql <Interact_HOME>/interactDT/ddl/aci_lrnfeature_ora.sql

ステップ: Interact ユーザー・プロフィール・テーブルを作成する

グローバル・オファー、オファー非表示、スコア・オーバーライドなど、いくつかの Interact のオプション機能では、ユーザー・プロフィール・データベースに特定のテーブルが必要となります。プロフィール・データベースについて、およびオファー非表示、グローバル・オファー、スコア・オーバーライドがオファー・サービス提供で果たす役割について詳しくは、「*IBM Interact 管理者ガイド*」を参照してください。

データベース・クライアントを使用して、適切な SQL スキ립トを該当のデータベースまたはスキーマに対して実行し、必要なそれらのユーザー・テーブルを作成します。複数のオーディエンス・レベルが定義されている場合、オーディエンス・レベルごとに必要となるいずれかのテーブルを作成しなければなりません。

ユーザー・プロフィール・テーブル

次の表には、以下のオプション・プロフィール・テーブルを作成するために使用する必要のある SQL スキ립トがリストされています。

- グローバル・オファー・テーブル (UACI_DefaultOffers)
- オファー非表示テーブル (UACI_BlackList)
- スコア・オーバーライド・テーブル (UACI_ScoreOverride)

SQL スキ립トは、Interact インストール環境の下の ddl ディレクトリーにあります。

これらのスキ립トは、オーディエンス・レベルごとに 1 回実行しなければなりません。異なるオーディエンス・レベル (最初のものに続く) ごとにスキ립トを変更して、スキ립トを実行した後に作成されるプロフィール・テーブルを名前変更します。

表 7. ユーザー・プロフィール・テーブルを作成するスキ립ト

データ・ソース・ タイプ	スキ립ト名
IBM DB2	aci_usrtab_db2.sql

表7. ユーザー・プロファイル・テーブルを作成するスクリプト (続き)

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
Microsoft SQL Server	aci_usrtab_sqlsvr.sql
Oracle	aci_usrtab_ora.sql

拡張スコア設定 (オプション)

以下の表は、拡張スコア設定機能を使用して Interact 学習アルゴリズムをオーバーライドする場合に、実行しなければならない SQL スクリプトがリストされています。

SQL スクリプトはすべて、Interact インストール環境の下の `ddl/acifeatures` ディレクトリにあります。

スコア設定テーブルが Unicode を使用するよう構成されている場合は、Interact インストール環境の下の `ddl/acifeatures/Unicode` ディレクトリにある適切なスクリプトを使用して、学習テーブルを作成します。

これらのスクリプトは、ユーザー・プロファイル・データベースに対して実行されることが意図されていることに注意してください。

表8. スコア設定テーブルのスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	aci_scoringfeature_db2.sql
Microsoft SQL Server	aci_scoringfeature_sqlsvr.sql
Oracle	aci_scoringfeature_ora.sql

Interact 機能を有効にするためのデータベース・スクリプトの実行

Interact で使用可能ないくつかのオプション機能では、プロファイル・データベースの特定のテーブルに変更を加える必要があります。設計環境とランタイム環境の両方の Interact インストールに、機能 `ddl` スクリプトが含まれています。これらのスクリプトによって、すべての必要な列がテーブルに追加されます。

これらの機能を有効にするには、以下に示すデータベースやテーブルに対して適切なスクリプトを実行します。

`dbType` はデータベース・タイプです (Microsoft SQL Server の場合は `sqlsvr`、Oracle の場合は `ora`、IBM DB2 の場合は `db2` になります)。

機能名	機能スクリプト	実行対象	変更
グローバル・オファー、オファー非表示、およびスコア・オーバーライド	ランタイム環境のインストール・ディレクトリー: Interact_Home¥ddl¥ acifeatures¥ aci_usrtab_dbType.sql	プロファイル・データベース (userProdDataSource)	DefaultOffers、 UACI_BlackList、および UACI_ScoreOverride の各テーブルを作成します。
スコア設定	ランタイム環境のインストール・ディレクトリー: Interact_Home¥ddl¥ acifeatures¥ aci_scoringfeature_dbType .sql	プロファイル・データベース (userProdDataSource) のスコア・オーバーライド・テーブル	LikelihoodScore 列および AdjExploreScore 列を追加 します。
学習	設計時間環境のインストール・ディレクトリー Interact_Home¥InteractDT¥ ddl¥ acifeatures¥ aci_lrnfeature_dbType.sql	コンタクト履歴テーブルを含む Campaign データベース	列 RTSelectionMethod を UA_DtlContactHist テーブルに追加します。このスクリプトは、オプションの Interact Reports Pack によって提供されるレポート作成機能でも必要です。

ステップ: Interact の手動での登録 (必要な場合)

インストール処理の際に Interact インストーラーが Marketing Platform システム・テーブルに接続できなかった場合、その失敗を通知するエラー・メッセージが表示されます。インストール処理は続行しますが、エラー・メッセージが表示される場合、インストーラーを閉じた後、Interact 情報を Marketing Platform システム・テーブルに手動でインポートする必要があります。このセクションで示される各製品の指示に従ってください。

この手順で言及されるユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにあります。

IBM Interact 設計環境を手動で登録する方法

Interact インストーラーが Marketing Platform データベースに接続できないために製品を登録することができない場合、以下のコマンドをガイドラインとして使って configTool ユーティリティーを実行します。このコマンドは、メニュー項目をインポートし、構成プロパティーを設定します。ユーティリティーは、ファイルの数だけ実行します。ファイルは 1 つなので、ユーティリティーを実行しなければならない回数は 1 回です。

```
configTool -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|mainMenu|Campaign" -f
"full_path_to_Interact_DT_installation_directory¥interactDT¥ conf¥
interact_navigation.xml"
```

```
configTool -v -i -o -p "Affinium|Campaign|about" -f
"full_path_to_Interact_DT_installation_directory¥interactDT¥ conf¥
interact_subcomponent_version.xml"
```

Interact 設計環境の構成プロパティは、Campaign の構成プロパティに含まれています。

configTool ユーティリティの使用については、「*IBM Marketing Platform* インストール・ガイド」の『configTool ユーティリティ』を参照してください。

```
Campaign > partitions > partition[n] > server > Internal >
interactInstalled
```

 構成プロパティを「はい」に設定することにより、Interact を手動で有効にする必要が生じる場合があります。

IBM Interact ランタイム環境を手動で登録する方法

Interact インストーラーが Marketing Platform データベースに接続できないために製品を登録することができない場合、以下のコマンドをガイドラインとして使って configTool ユーティリティを実行します。このコマンドは、構成プロパティをインポートします。ユーティリティは、ファイルの数だけ実行します。ファイルは 1 つなので、ユーティリティを実行しなければならない回数は 1 回です。

重要: Marketing Platform で登録する Interact ランタイム環境のインスタンスは、1 つのサーバー・グループにつき 1 つだけにしてください。1 つのサーバー・グループ内の Interact ランタイム・サーバーのインスタンスはすべて、同じ構成プロパティ・セットを使用します。Marketing Platform で Interact ランタイム・サーバーをもう 1 つ登録すると、前の構成設定が上書きされる可能性があります。

```
configTool -r Interact -f "full_path_to_Interact_RT_installation_directory
¥conf¥interact_configuration.xml"
```

Interact ランタイム環境にはグラフィカル・ユーザー・インターフェースがないため、ナビゲーション・ファイルを登録する必要はありません。

configTool ユーティリティの使用については、「*IBM Marketing Platform* インストール・ガイド」の『configTool ユーティリティ』を参照してください。

configTool ユーティリティ

「構成」ページのプロパティと値は、Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。configTool ユーティリティは、Marketing Platform システム・テーブルに構成設定をインポートしたり、そこから構成設定をエクスポートしたりします。

configTool をいつ使用するか

configTool は、次のような目的で使用できます。

- Campaign に付属のパーティションおよびデータ・ソース・テンプレートをインポートする場合、このテンプレートは、「構成」ページを使用して変更したり複製したりできます。
- 製品インストーラーがプロパティをデータベースに自動的に追加できない場合に IBM EMM 製品を登録する (その構成プロパティをインポートする)。
- バックアップ用の構成設定の XML バージョンをエクスポートし、IBM EMM の別のインストールにインポートする。

- 「**カテゴリの削除**」リンクのないカテゴリを削除する。これを行うには、`configTool` を使用して構成をエクスポートし、カテゴリを作成する XML を手動で削除し、`configTool` を使用して、編集された XML をインポートします。

重要: このユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブル・データベース (構成プロパティとその値が含まれている) の `usm_configuration` テーブルと `usm_configuration_values` テーブルを変更します。最良の結果を得るために、それらのテーブルのバックアップ・コピーを作成するか、`configTool` を使って既存の構成をエクスポートし、生成されるファイルをバックアップしてください。そうすることで、`configTool` を使ったインポートに失敗した場合に構成を復元することができます。

有効な製品名

`configTool` ユーティリティーは、このセクションの後半で説明するように、製品を登録および登録解除するコマンドのパラメーターとして製品名を使用します。8.0.0 リリースの IBM EMM では、多くの製品名が変更されています。しかし、`configTool` によって認識される名前は変更されていません。`configTool` で使用できる有効な製品名を、現在の製品名とともに以下にリストします。

製品名	<code>configTool</code> で使用する名前
Marketing Platform	Manager
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact
Contact Optimization	Optimize
Marketing Operations	Plan
CustomerInsight	Insight
Digital Analytics for On Premises	NetInsight
PredictiveInsight	Model
Leads	Leads

構文

```
configTool -d -p "elementPath" [-o]
```

```
configTool -i -p "parent ElementPath" -f importFile [-o]
```

```
configTool -x -p "elementPath" -f exportFile
```

```
configTool -r productName -f registrationFile [-o]
```

```
configTool -u productName
```

コマンド

```
-d -p "elementPath"
```

構成プロパティ階層内のパスを指定して、構成プロパティとその設定を削除します。

要素パスにはカテゴリおよびプロパティの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、必要なカテゴリまたはプロパティを選択して、右側のペインで括弧付きで表示されるパスを見ると分かります。構成プロパティの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

次のことに注意してください。

- このコマンドは、アプリケーション全体ではなく、アプリケーション内のカテゴリとプロパティだけを削除することができます。アプリケーション全体を登録解除するには、`-u` コマンドを使用します。
- 「構成」ページに「**カテゴリの削除**」リンクがないカテゴリを削除するには、`-o` オプションを使用します。

`-i -p "parentElementPath" -f importFile`

指定された XML ファイルから構成プロパティとその設定をインポートします。

インポートするには、カテゴリのインポート先の親要素へのパスを指定します。`configTool` ユーティリティは、パス内で指定するカテゴリの下に プロパティをインポートします。

カテゴリは最上位の下のどのレベルにでも追加することができますが、最上位カテゴリと同じレベルにカテゴリを追加することはできません。

親要素パスにはカテゴリおよびプロパティの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、必要なカテゴリまたはプロパティを選択して、右側のペインで括弧付きで表示されるパスを見ると分かります。構成プロパティの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

`tools/bin` ディレクトリーからの相対的なインポート・ファイルの場所を指定するか、ディレクトリーの絶対パスを指定することができます。相対パスを指定した場合、またはパスを指定しない場合、`configTool` は `tools/bin` ディレクトリーから相対的な場所にあるファイルを最初に探します。

デフォルトでこのコマンドは既存のカテゴリを上書きしませんが、`-o` オプションを使用して上書きを強制することができます。

`-x -p "elementPath" -f exportFile`

指定された名前の XML ファイルに構成プロパティとその設定をエクスポートします。

すべての構成プロパティをエクスポートすることも、構成プロパティ階層内のパスを指定することによって特定のカテゴリにエクスポートを制限することもできます。

要素パスにはカテゴリおよびプロパティの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、必要なカテゴリまたはプロパティを選択し

て、右側のペインで括弧付きで表示されるパスを見ると分かります。構成プロパティの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

現行ディレクトリーからの相対的なエクスポート・ファイル場所を指定するか、ディレクトリーの絶対パスを指定することができます。ファイルの指定に区切り文字 (Unix の場合は / で、Windows の場合は \ または ¥) が含まれていない場合、configTool は Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにファイルを作成します。xml 拡張子を付けない場合、configTool によってそれが追加されます。

-r productName -f registrationFile

アプリケーションを登録します。tools/bin ディレクトリーに相対する登録ファイルの場所を指定することも、絶対パスを指定することもできます。デフォルトでこのコマンドは既存の構成を上書きしませんが、-o オプションを使用して上書きを強制することができます。productName パラメーターは、上記にリストしたいいずれかでなければなりません。

次のことに注意してください。

- -r オプションを使用する際、登録ファイルには XML 内の最初のタグとして <application> を指定する必要があります。

Marketing Platform データベースに構成プロパティを挿入するために使用できるファイルが他に製品で提供されている場合があります。それらのファイルについては、-i オプションを使用します。最初のタグとして <application> タグがあるファイルだけを -r オプションとともに使用できます。

- Marketing Platform の登録ファイルの名前は Manager_config.xml で、最初のタグは <Suite> です。新規インストールでこのファイルを登録するには、populateDb ユーティリティーを使用するか、「IBM Marketing Platform インストール・ガイド」にある説明に従って Marketing Platform インストーラーを再実行します。
- 初期インストールの後、Marketing Platform 以外の製品を登録するには、-r オプションと -o とともに configTool を使用して、既存のプロパティを上書きします。

-u productName

productName によって指定されたアプリケーションを登録解除します。製品カテゴリーへのパスを含める必要はありません。製品名だけで十分です。productName パラメーターは、上記にリストしたいいずれかでなければなりません。これにより、製品のすべてのプロパティおよび構成設定が削除されます。

オプション

-o

-i または -r とともに使用すると、既存のカテゴリーまたは製品の登録 (ノード) を上書きします。

-d とともに使用すると、「構成」ページに「**カテゴリーの削除**」リンクがないカテゴリー (ノード) を削除することができます。

例

- Marketing Platform インストールの conf ディレクトリーにある Product_config.xml という名前のファイルから構成設定をインポートします。

```
configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml
```

- 提供されている Campaign データ・ソース・テンプレートの 1 つをデフォルトの Campaign パーティションである partition1 にインポートします。この例では、Oracle データ・ソース・テンプレート OracleTemplate.xml が Marketing Platform インストールの tools/bin ディレクトリーにあることを前提としています。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f OracleTemplate.xml
```

- D:\%backups ディレクトリー内の myConfig.xml という名前のファイルにすべての構成設定をエクスポートします。

```
configTool -x -f D:\%backups%myConfig.xml
```

- 既存の Campaign パーティション (データ・ソース・エントリーが完備されている) をエクスポートし、それを partitionTemplate.xml という名前のファイルに保存し、Marketing Platform インストールのデフォルトの tools/bin ディレクトリーに保管します。

```
configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f partitionTemplate.xml
```

- Marketing Platform インストールのデフォルト tools/bin ディレクトリーにある app_config.xml という名前のファイルを使って productName という名前のアプリケーションを手動で登録し、このアプリケーションの既存の登録を強制的に上書きします。

```
configTool -r product Name -f app_config.xml -o
```

- productName という名前のアプリケーションを登録解除します。

```
configTool -u productName
```

第 5 章 ステップ: IBM Interact を配置する

このトピックのガイドラインに従って、Interact 設計環境およびランタイム・サーバーを配置します。

ここでは、Web アプリケーション・サーバーでの作業の方法は理解していると想定します。管理コンソール内の移動などに関する詳細は、Web アプリケーション・サーバーの文書を参照してください。

設計環境の配置

IBM インストーラーを実行したときに、Interact を EAR ファイルに含めたか、または Interact WAR ファイルを配置するように選択した可能性があります。Marketing Platform または他の製品を EAR ファイルに含めた場合、EAR ファイルに含めた製品の個々のインストール・ガイドに詳しく示されている、配置ガイドラインのすべてに従う必要があります。

Interact をインストールした後に、Campaign を配置すると設計環境が自動的に配置されます。Campaign.war ファイルを配置した後に、Campaign で設計環境を使用可能にするためには、いくつかの構成手順に従う必要があります。Campaign.war ファイルは、Campaign インストール・ディレクトリーにあることに注意してください。

ランタイム・サーバーの配置

インストールするランタイム・サーバーのインスタンスごとに、Interact ランタイム・サーバーを配置する必要があります。例えば、パフォーマンス要件によって 6 つのインスタンスのランタイム・サーバーが必要な場合は、Interact ランタイムを 6 回インストールして配置する必要があります。ランタイム・サーバーは設計環境と同じサーバー上に配置することも、別のサーバー上に配置することもできます。InteractRT.war は、Interact インストール・ディレクトリーにあります。

注: Interact ランタイムを配置するとき、コンテキスト・ルートはデフォルトで `interact` に設定されるはずですが、そうになっていない場合は、コンテキスト・ルートを更新して `interact` に設定してください。この値以外のコンテキスト・ルートは使用しないでください。この値以外のコンテキスト・ルートを使用すると、ランタイムへのナビゲーションおよび Interact ランタイムのリンクとページ内でのナビゲーションが正常な動作をしなくなります。

WebSphere のガイドライン

IBM EMM アプリケーション・ファイルを WebSphere に配置するときには、このセクションのガイドラインに従ってください。

WebSphere での配置の手順

1. WebSphere のバージョンが、必要なフィックスパックやアップグレードを含め、「IBM Enterprise 製品の推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件」の資料で説明されている要件を満たしていることを確認してください。
2. システム・テーブルが DB2 内にある場合、データ・ソースのカスタム・プロパティに移動します。**resultSetHoldability** の値を **1** に設定します。

「**resultSetHoldability**」という名前のフィールドが見つからない場合は、その名前のカスタム・プロパティを追加し、その値を **1** に設定します。

3. IBM EAR ファイルまたは WAR ファイルをエンタープライズ・アプリケーションとして配置します。

以下の指示に従ってください。以下で特に説明されていないものについては、デフォルトの設定を受け入れることができます。

以下の方法で、JSP コンパイラーの JDK ソース・レベルが適切な Java バージョンに設定されていること、また JSP ページがプリコンパイルされていることを確認します。

- ブラウズして WAR ファイルを選択するフォームで、「すべてのインストール・オプションとパラメーターの表示 (Show me all installation options and parameters)」を選択して、「インストール・オプションの選択 (Select Installation Options)」ウィザードが実行されるようにします。
 - 「インストール・オプションの選択 (Select Installation Options)」ウィザードのステップ 1 で、「JavaServer Pages ファイルのプリコンパイル (Precompile JavaServer Pages files)」を選択します。
 - 「インストール・オプションの選択」ウィザードのステップ 3 で、「JDK ソース・レベル」が 16 に設定されるようにします。16 が使用不可の場合は、15 を選択します。
4. サーバーの「Web コンテナ設定 (Web Container Settings)」> 「セッション管理 (Session Management)」セクションで、cookie を有効にします。
 5. 配置された各アプリケーションに対して異なるセッション Cookie 名を指定します。配置したファイルに応じて、以下のいずれかの手順を使用します。
 - 別個の WAR ファイルを配置した場合:
 - WebSphere コンソールで、サーバーの「アプリケーション (Applications)」> 「エンタープライズ・アプリケーション」> [配置されたアプリケーション]> 「セッション管理」> 「Cookie を有効にする」> 「Cookie 名」セクションで、固有のセッション Cookie 名を指定します。
 - 「セッション管理」の「セッション管理のオーバーライド」チェック・ボックスを選択します。
 - 別個の EAR ファイルを配置した場合:
 - WebSphere コンソールで、サーバーの「アプリケーション (Applications)」> 「エンタープライズ・アプリケーション」> [配置されたアプリケーション]> 「モジュールの管理 (Module Management)」> [配置されたモジュール]> 「セッション管理」> 「Cookie を有効にする」> 「Cookie 名」セクションで、固有のセッション Cookie 名を指定します。

- 「セッション管理」の「セッション管理のオーバーライド」チェック・ボックスを選択します。
6. サーバーの「アプリケーション (Applications)」>「エンタープライズ・アプリケーション」セクションで、配置した EAR ファイルまたは WAR ファイルを選択してから「クラス・ロードおよび更新の検出」を選択して、「構成」タブの以下の一般プロパティを設定します。
- WAR ファイルを配置する場合:
 - 「クラス・ローダー順序」で、「最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)」を選択します。
 - 「WAR クラス・ローダーのポリシー (WAR class loader policy)」で、「アプリケーション用の単一のクラス・ローダー (Single class loader for application)」を選択します。
 - EAR ファイルを配置する場合:
 - 「クラス・ローダー順序」で、「最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)」を選択します。
 - 「WAR クラス・ローダーのポリシー (WAR class loader policy)」で、「アプリケーションの各 WAR ファイル用のクラス・ローダー (Class loader for each WAR file in application)」を選択します。
 - 「エンタープライズ・アプリケーション」> [配置されるアプリケーション]>「モジュールの管理」> [モジュール名] を選択し、「クラス・ローダー順序」を「最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)」に設定します。
7. 配置を開始します。

WebLogic のガイドライン

IBM EMM 製品を WebLogic に配置するときには、このセクションのガイドラインに従ってください。

WebLogic のすべてのバージョン、すべての IBM EMM 製品

- IBM EMM 製品は、WebLogic によって使用される JVM をカスタマイズします。JVM に関連したエラーが生じた場合、IBM EMM 製品に専用の WebLogic インスタンスを作成しなければならないことがあります。
- 起動スクリプト (startWebLogic.cmd) 中の JAVA_VENDOR 変数を参照して、使用する WebLogic ドメイン用に選択された SDK が Sun SDK であることを確認します。その変数は、JAVA_VENDOR=Sun に設定されている必要があります。それが JAVA_VENDOR=BEA に設定されている場合、JRockit が選択されています。JRockit はサポートされていません。選択されている SDK を変更する方法については、WebLogic の文書を参照してください。
- IBM EMM 製品を Web アプリケーション・モジュールとして配置します。
- UNIX システムでは、図形によるグラフが正しくレンダリングされるように WebLogic をコンソールから開始する必要があります。コンソールは通常、サーバーが実行されているマシンです。ただし、Web アプリケーション・サーバーが別にセットアップされているケースもあります。

コンソールにアクセスできない場合やコンソールが存在しない場合は、Exceed を使用してコンソールをエミュレートできます。ローカルの Xserver プロセスがルート・ウィンドウまたは単一ウィンドウのモードで UNIX マシンに接続するように、Exceed を構成する必要があります。Exceed を使用して Web アプリケーション・サーバーを開始する場合、Web アプリケーション・サーバーが実行を続行できるように、バックグラウンドで Exceed の実行を続ける必要があります。グラフのレンダリングに関する問題が生じた場合は、IBM テクニカル・サポートに連絡して詳細な指示を受けてください。

Telnet または SSH 経由で UNIX マシンに接続すると、グラフのレンダリングに関する問題が常に生じます。

- IIS プラグインを使用するように WebLogic を構成する場合は、WebLogic の文書を参照してください。
- 実稼働環境で配置する場合は、setDomainEnv スクリプトに次の行を追加して、JVM メモリー・ヒープ・サイズ・パラメーターを 1024 に設定します: Set MEM_ARGS=-Xms1024m -Xmx1024m -XX:MaxPermSize=256m

第 6 章 Interact の配置後の構成について

Interact を配置した後に、このセクションで説明されている作業を実行する必要があります。

さらに、IBM EMM レポート作成機能を使用する場合、「Marketing Platform インストール・ガイド」で説明されている方法で、Interact のレポート・パックをインストールする必要があります。

ステップ: Interact 構成プロパティを設定する

このセクションでは、Interact の基本インストールで「構成」ページに設定する必要がある最低限の構成プロパティについて説明します。

Interact の「構成」ページには、オプションで調整可能な重要な機能を実行するためのプロパティもあります。プロパティの機能とその設定方法については、「IBM Interact 管理者ガイド」またはプロパティのコンテキスト・ヘルプを参照してください。

以下の必須プロパティを、このセクションで説明されているように設定する必要があります。

Interact ランタイム環境

- 『ステップ: Interact ランタイム環境のプロパティの構成』
- 44 ページの『ステップ: 複数の Interact ランタイム・サーバーを構成する』

Interact 設計環境

1. 45 ページの『ステップ: テスト実行のデータ・ソースを構成する』.
2. 45 ページの『ステップ: サーバー・グループを追加する』
3. 46 ページの『ステップ: 対話式フローチャートのテスト実行のためのサーバー・グループを選択する』
4. 46 ページの『ステップ: コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールを構成する』

ステップ: Interact ランタイム環境のプロパティの構成

基本 Interact ランタイム操作では、以下のプロパティを設定する必要があります。他にも、パフォーマンスを調整するために後で構成できるプロパティがあります。

以下のプロパティは、それぞれのサーバー・グループで構成する必要があります。

- ランタイム環境のプロファイル・テーブルのデータ・ソース。
- ランタイム環境のシステム・テーブルのデータ・ソース。
- テスト実行テーブルのデータ・ソース。

- 組み込み学習テーブルのデータ・ソース。このプロパティは、組み込み学習を使用する場合にのみ必要です。
- クロスセッション・レスポンス・トラッキング用のコンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブルのデータ・ソース。このプロパティは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングを使用する場合にのみ必要です。
- Interact > プロファイル > オーディエンス・レベル

このカテゴリーは、Campaign に対して定義したオーディエンス・レベルと一致する必要があります。ただし、構成する必要があるオーディエンス・レベルは、対話式フローチャートで使用されるものだけです。

ステップ: 複数の Interact ランタイム・サーバーを構成する

可能な場合には、永続的な (スティッキー) セッションが有効になったロード・ balancer を使用して作業するように、サーバー・グループを構成してください。それが可能ではない場合は、Interact API を使用して作業するときに、サーバー・グループからランタイム・サーバーを選択するための何らかの手段を作成する必要があります。

永続的な (スティッキー) セッションのあるロード・ balancer を使用できない場合、サーバー・グループ内のランタイム・サーバーを構成して、キャッシュ・データを共有するためのマルチキャスト・アドレスが使用されるようにすることができます。これらのすべてのサーバーは、単一サーバー・グループを形成しなければなりません。

注: 分散キャッシュを使用する場合、マルチキャストがサーバー・グループのすべてのメンバー間で機能するようにする必要があります。

1. 本書に説明されているように、追加の Interact ランタイム・サーバーをインストールします。

複数のランタイム・サーバーをインストールするときは、インストーラーを実行する前に Interact Run Time マシンのネットワーク接続を削除して、追加の Interact インストールが Marketing Platform 構成を上書きしないようにする必要があります。

Interact Run Time サーバーのすべてのインスタンスをインストールした後に、Marketing Platform を再始動します。

2. 分散キャッシュを使用可能にするには、構成プロパティを構成するときに、以下のプロパティも構成します。
 - 「Interact」 > 「sessionManagement」 > 「cacheType」 - **Distributed** に設定します。
 - 「Interact」 > 「sessionManagement」 > 「multicastIPAddress」 - このサーバー・グループのすべての Interact サーバーがリスニングに使用する IP アドレスを定義します。この IP アドレスは、使用するサーバー・グループの中で一意でなければなりません。
 - 「Interact」 > 「sessionManagement」 > 「multicastPort」 - すべての Interact サーバーがリスニングに使用するポートを定義します。

注: Interact サーバーをサーバー・グループからアンインストールするとき、間違えてすべての IBM EMM 構成を削除しないようにするため、特別な指示に従う必要があります。

ステップ: テスト実行のデータ・ソースを構成する

対話式フローチャートでは、Interact テスト実行テーブルを Campaign データ・ソースとして追加することにより、Interact テスト実行テーブルに接続する必要があります。追加の Campaign データ・ソースを追加するには、「*IBM Campaign インストール・ガイド*」に説明されているように、Campaign > partitions > partitionN > datasources に対して新しいカテゴリーを追加します。

OwnerForTableDisplay プロパティを使用して、対話式チャネルでテーブルをマッピングする際に表示されるテーブルを限定するためのデータベース・スキーマを定義します。

Interact 設計時に使用されるテスト実行データ・ソースは、設計時のテスト実行テーブルの JNDI 名を指定している必要があります。

Interact 環境を複数のロケールで構成する場合、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照して、使用するデータベース・タイプで必要なエンコード・プロパティを構成する方法を確認してください。

SQL Server データベースを使用する場合、ロケールを日本語または韓国語に設定するときには、テスト実行データ・ソースで以下のプロパティを構成する必要があります。

- Campaign > partitions > partitionN > datasources > testRunDataSource > ODBCUnicode — UCS-2
- Campaign > partitions > partitionN > datasources > testRunDataSource > stringEncoding — WIDEUTF-8

ステップ: サーバー・グループを追加する

設計環境のための Marketing Platform の「構成」ページで Interact ランタイム・サーバーの場所を定義して、それらにアクセスし、対話式フローチャートを配置してそのテスト実行を行えるようにする必要があります。

少なくとも 1 つのサーバー・グループを作成する必要があります。そのサーバー・グループにはインスタンス URL によって定義された少なくとも 1 つの Interact ランタイム・サーバーが含まれていなければなりません。例えば Web サイトとの Interact のために 1 つ、コール・センターとの Interact のために 1 つ、テスト用に 1 つなど、複数のサーバー・グループを持つことが可能です。各サーバー・グループには、それぞれのインスタンス URL が Interact ランタイムの 1 つのインスタンスを表す、複数のインスタンス URL を含めることができます。

重要: 各 Interact ランタイムは、1 つの設計時とのみ関連付けることができます。

環境内に複数の Interact 設計時システムが稼働している場合、特定の設計時によって構成された Interact サーバーを他の設計時によって構成することはできません。

2 つの異なる設計時が同じ Interact ランタイムに配置データを送信した場合、それらの配置は破損して、未定義の動作が生じることがあります。

Interact 設計時構成に含まれるすべてのサーバー・グループで、ユーザー・プロフィール・テーブルに JNDI 名を指定する必要があります。これは、グローバル・オファー、オファー非表示、スコア・オーバーライド、インタラクト・リスト・プロセス・ボックスでの SQL によるオファーなど、ランタイム機能を Interact でサポートするために必要です。

「Campaign」 > 「partitions」 > 「partition[n]」 > 「Interact」 > 「serverGroups」 > 「(serverGroup)」の構成プロパティ・テンプレートを使用して、これらのサーバー・グループを作成します。カテゴリ名は編成の目的のみに使用されていますが、混乱を避けるためにカテゴリの名前を serverGroupName プロパティの名前と同じにすることができます。

ステップ: 対話式フローチャートのテスト実行のためのサーバー・グループを選択する

対話式フローチャートには、実行する Interact ランタイムのインスタンスが必要です。Campaign バッチ・フローチャート・エンジンを使用して対話式フローチャートを実行することはできません。対話式フローチャートのテスト実行を行うために Campaign が参照するサーバー・グループを定義する必要があります。

以下の構成プロパティを設定して、対話式フローチャートのテスト実行を構成します。このサーバー・グループは、対話式チャネルのテーブル・マッピングを検証するため、および対話式フローチャート内のユーザー・マクロの構文を検査するためにも使用されます。

- 「Campaign」 > 「partitions」 > 「partition[n]」
 > 「Interact」 > 「flowchart」 > 「serverGroup」
- 「Campaign」 > 「partitions」 > 「partition[n]」
 > 「Interact」 > 「flowchart」 > 「dataSource」

dataSource プロパティに指定するデータ・ソースは Campaign データ・ソースでなければならないことに注意してください。

ステップ: コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールを構成する

Interact ランタイム・サーバーは、コンタクトおよびレスポンス履歴をステージング・テーブルに保管します。このデータをレポート作成に使用可能にし、Campaign で使用できるようにするためには、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールを構成して、データが Interact ランタイム・サーバーから Campaign コンタクトおよびレスポンス履歴テーブルにコピーされるようにする必要があります。

注: コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが機能するようにするためには、設計環境の「構成」ページで Interact ランタイム・データ・ソース資格情報を構成する必要があります。

1. Interact ランタイム・データベースを、Campaign をホスティングしている Web アプリケーション・サーバーに追加したことを確認してください。

2. 「Campaign」 > 「partitions」 > 「partition[n]」
> 「Interact」 > 「contactAndResponseHistTracking」
> 「runtimeDataSources」 > 「(runtimeDataSource)」の構成プロパティ・テンプレートを使用して、ランタイム・データ・ソースを追加します。
3. コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集する Interact ランタイム・サーバー・グループごとに、上記のステップを繰り返します。

ステップ: Interact システム・ユーザーの作成

Interact では、ランタイム環境ユーザーと設計環境ユーザーの 2 組のユーザーの構成が必要です。

- **ランタイム環境ユーザー**は、Interact ランタイム・サーバーで作業するように構成される IBM ユーザー・アカウントです。このユーザーは、設計環境からランタイム環境に、また JMXMP プロトコルを使用する JMX モニターを使用するとき Interact 構成データを送る必要があります。
- **設計環境ユーザー**は、Campaign ユーザーです。「*Campaign 管理者ガイド*」の説明に従って、設計チームのさまざまなメンバーのセキュリティーを構成します。

ランタイム環境ユーザー

重要: Interact ランタイム・ユーザー・アカウントは、内部ユーザー・アカウントでなければなりません。

設計環境からランタイム環境に Interact 構成データを送るユーザーは、IBM EMM ユーザーとしてログインする必要があります。この内部ユーザー・アカウントは、Interact ランタイム・サーバーが従属する Marketing Platform のインスタンスに存在している必要があります。

重要: 同じサーバー・グループに属するすべての Interact サーバーは、ランタイム配置用の同じユーザー資格情報を共有する必要があります。Interact サーバーごとに個別の Marketing Platform インスタンスがある場合、同じユーザー・ログイン名とパスワードのアカウントをそれぞれのインスタンスに対して作成する必要があります。

JMXMP プロトコルを使用する JMX モニターのセキュリティーを有効にする場合、JMX モニター・セキュリティー用に別のユーザーが必要になる場合があります。

設計環境ユーザー

Interact 設計環境ユーザーの構成は、「*Campaign 管理者ガイド*」の説明に従って、Campaign ユーザーを構成するのと同じ方法で行います。

Interact 設計環境ユーザーがフローチャートおよび以下の表にリストする権限を編集するために Campaign ユーザーのすべての権限が付与されるように構成する必要があります。

対話式フローチャートの編集権限を持つすべての Campaign ユーザーのために、Interact テスト実行テーブルのデータ・ソース資格情報をアカウントに保管する必要があります。

カテゴリー	権限
キャンペーン	<ul style="list-style-type: none"> • キャンペーン対話方法の表示 - キャンペーンの対話方法タブを表示することができます。ただし、編集することはできません。 • キャンペーン対話方法の編集 - 対話方法タブに対して変更を加えることができます (処理ルールを含む)。 • キャンペーン対話方法の削除 - 対話方法タブをキャンペーンから削除できます。対話方法タブが割り当てられている対話式チャンネルが配置されている場合、その対話方法タブの削除は制限されます。 • キャンペーン対話方法の追加 - 新規対話方法タブをキャンペーンに作成できます。 • キャンペーン対話方法配置の開始 - 対話方法タブに配置または配置解除のマークを付けることができます。
対話式チャンネル	<ul style="list-style-type: none"> • 対話式チャンネルの配置 - 対話式チャンネルを Interact ランタイム環境に配置できます。 • 対話式チャンネルの編集 - 対話式チャンネルに変更を加えることができます。 • 対話式チャンネルの削除 - 対話式チャンネルを削除できます。対話式チャンネルが配置されている場合、対話式チャンネルの削除は制限されます。 • 対話式チャンネルの表示 - 対話式チャンネルを表示できます。ただし、編集することはできません。 • 対話式チャンネルの追加 - 新規対話式チャンネルを作成できます。 • 対話式チャンネル・レポートの表示 - 対話式チャンネルの「分析」タブを表示できます。 • 対話式チャンネルの子オブジェクトの追加 - インタラクション・ポイント、ゾーン、イベント、およびカテゴリーを追加できます。
セッション	<ul style="list-style-type: none"> • 対話式フローチャートの表示 - 対話式フローチャートをセッションに表示できます。 • 対話式フローチャートの追加 - 新規対話式フローチャートをセッションに作成できます。 • 対話式フローチャートの編集 - 対話式フローチャートに変更を加えることができます。 • 対話式フローチャートの削除 - 対話式フローチャートを削除できます。対話式フローチャートが割り当てられている対話式チャンネルが配置されている場合、その対話式フローチャートの削除は制限されます。 • 対話式フローチャートのコピー - 対話式フローチャートをコピーできます。 • 対話式フローチャートのテスト実行 - 対話式フローチャートのテスト実行を開始できます。 • 対話式フローチャートの確認 - 対話式フローチャートを表示したり、設定を表示するためにプロセスを開いたりできます。ただし、変更を加えることはできません。 • 対話式フローチャートの配置 - 対話式フローチャートに配置または配置解除のマークを付けることができます。

Interact がインストールおよび構成されている場合、デフォルトのグローバル・ポリシーおよび新規ポリシーに対して以下の追加オプションを使用することができます。なお、Interact ユーザーの中には何らかの Campaign 権限 (カスタム・マクロなど) を必要とするユーザーもいます。

ステップ: Interact インストールの確認

Interact 設計環境がインストールされていることを確認するには、IBM EMM にログインし、「**Campaign**」>「**対話式チャネル**」にアクセスできることを確認します。

Interact ランタイム環境が正しくインストールされていることを確認するには、以下の手順を使用します。

1. Internet Explorer を使って Interact ランタイム URL にアクセスします。

URL は、次のとおりです。

`http://host.domain.com:port/interact/jsp/admin.jsp`

`host.domain.com` は Interact がインストールされているマシンで、`port` は Interact アプリケーション・サーバーが listen しているポート番号です。

2. 「**Interact 初期化状況 (Interact Initialization Status)**」をクリックします。

Interact サーバーが正しく稼働している場合、Interact は次のメッセージで応答します。

System initialized with no errors!

初期化に失敗した場合、このインストール手順を確認し、すべての指示に従ったことを確認してください。

第 7 章 パーティションについて

Campaign ファミリーの製品にはパーティションがあり、これによってさまざまなユーザーのグループに関連付けられているデータを保護することができます。

複数のパーティションで動作するように Campaign または関連する IBM EMM アプリケーションを構成すると、各パーティションはアプリケーション・ユーザーに対して個別のアプリケーションのインスタンスとして表示されます。同じシステムに他のパーティションが存在することを示すものはありません。

Campaign とともに動作する IBM EMM アプリケーションの場合、Campaign のインスタンスが既に構成されているパーティション内でのみアプリケーションを構成することができます。各パーティション内のアプリケーション・ユーザーは、同じパーティションの Campaign に対して構成されている Campaign 機能、データ、およびカスタマー・テーブルにのみアクセスすることができます。

Interact での複数のパーティションのセットアップ

以下のセクションで説明するように、複数のパーティションで動作するように Interact を構成することができます。

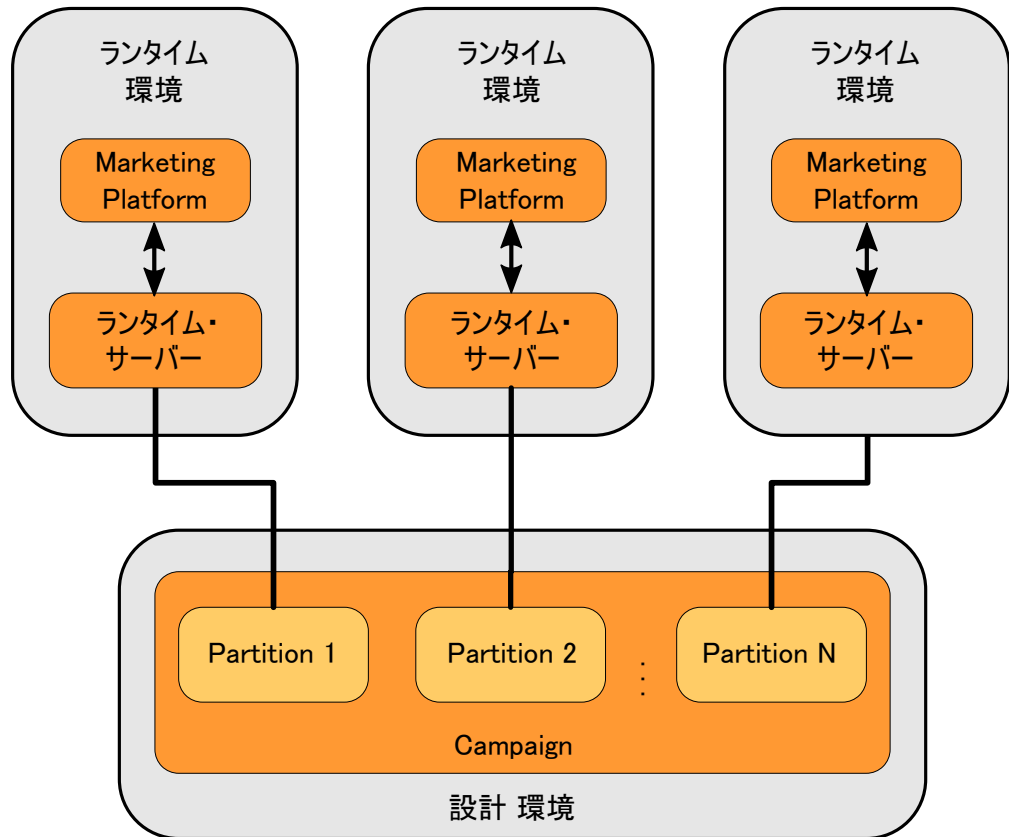
ランタイム環境

Interact ランタイムは、複数のパーティションをサポートしていません。複数のパーティションで動作するように Interact ランタイムを構成することはできず、設計時から 1 つの Interact ランタイムが複数のパーティションで動作することもできません。

設計時環境

Campaign および Interact 設計時環境で使用する複数のパーティションを作成することができます。各ユーザー・グループがそれぞれ異なる Interact および Campaign データ・セットにアクセスできるよう、パーティションを使用して Interact および Campaign を構成することができます。

Campaign で複数のパーティションをセットアップする場合、Interact に対して複数のパーティションをセットアップすることになります。以下の図で示されているように、各設計時パーティションで、個別の Interact ランタイム環境 (個別の Marketing Platform およびランタイム表を含む) と通信するように各パーティションを構成する必要があります。



Campaign > partitions > partition[N] > server > internal > interactInstalled 構成プロパティを「はい」に設定することにより、パーティションの Interact を手動で有効にする必要があります。

各パーティションで、43 ページの『ステップ: Interact 構成プロパティを設定する』でリストされている設計時の構成ステップを実行する必要があります。

第 8 章 すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件

どの IBM EMM 製品をアップグレードする場合にも、『インストールの準備』の章の 4 ページの『前提条件』の下でリストされている前提条件すべてを満たしている必要があります。

それに加えて、このセクションでリストされている前提条件も満たしている必要があります。

以前のインストールによって生成された応答ファイルの削除

インストーラーを実行して 8.6.0 より前のバージョンからアップグレードを行う前に、以前のインストールによって生成された応答ファイルをすべて削除する必要があります。

インストーラーの動作と応答ファイルの形式に変更が加えられているため、以前の応答ファイルには 8.6.0 以降のインストーラーとの互換性がありません。

以前の応答ファイルを削除しないと、インストーラーの実行時にインストーラー・フィールドに正しくないデータが事前に取り込まれていたり、あるいは、インストーラーによっていくつかのファイルがインストールされなかったり、構成ステップがスキップされたりする可能性があります。

応答ファイルの名前は `installer_<product><version>.properties` です。ただし、IBM インストーラー自体のファイルの場合はこれとは異なり、`installer.properties` という名前です。インストーラーは、インストール中にユーザーが指定するディレクトリーにこれらのファイルを作成します。デフォルトの場所は、ユーザーのホーム・ディレクトリーです。

ユーザー・アカウント要件 (UNIX のみ)

UNIX の場合、製品をインストールしたものと同一ユーザー・アカウントがアップグレードを実行する必要があります。

32 ビットから 64 ビットへのバージョンアップ

32 ビットから 64 ビットに IBM EMM 製品をバージョンアップする場合、以下の条件が満たされていることを確認してください。

- 製品データ・ソースのデータベース・クライアント・ライブラリーも 64 ビットである
- 関連するすべてのライブラリー・パス (例えば、開始スクリプトまたは環境スクリプト) が 64 ビット・バージョンのデータベース・ドライバーを正しく参照している

知識要件

この指示では、アップグレード実行担当者が以下の分野について理解していることを前提としています。

- 16 ページの『IBM EMM インストーラーの機能』で説明されている、IBM インストーラーの基本機能。
- 一般的な IBM EMM 製品機能およびコンポーネント (ファイル・システムの構成を含む)
- ソース製品バージョンおよび新規バージョンのインストールと構成のプロセス
- ソース・システムおよびターゲット・システムでの構成プロパティの保守
- レポートのインストールと構成のプロセス (そのレポートを使用している場合)

アップグレードの順序

アップグレードを行う際には、1 つの例外を除いて、5 ページの『IBM Marketing Platform の要件』で説明されているものと同じ考慮事項が適用されます。

Interact 8.x ランタイムは、Interact 7.x 配置を実行できます。そのため、設計環境の前にランタイム環境をアップグレードする必要があります。

また、他の IBM EMM 製品をアップグレードする場合、それより前か、それと同時に、Marketing Platform を正常にアップグレードする必要があることも覚えておいてください。Marketing Platform を互換性のあるリリースにアップグレードしないと、IBM EMM 製品をアップグレードすることができません。

Interact アップグレード・シナリオ

新規バージョンの Interact にアップグレードするには、以下のガイドラインに従います。

ソース・バージョン	アップグレード・パス
任意の 5.x または 6.x バージョン	<p>新規バージョンの Interact の新規インストールを新しい場所で実行します。</p> <p>注: Interact 5.x または 6.x から新規バージョンの Interact へのアップグレード・パスはありません。</p>
任意の 7.x バージョンまたは 8.5x より前のバージョン	<ol style="list-style-type: none"> 1. 前のバージョンをバージョン 8.5 または 8.6 にアップグレードします。 <ol style="list-style-type: none"> a. 旧バージョンを重ねてバージョン 8.5 または 8.6 のインプレース・インストールを実行します。 <p>設計環境とランタイム環境の両方に対して Interact インストーラーを使用します。</p> <p>重要: Interact 設計環境をアップグレードする前に Campaign をアップグレードする必要があります。</p> b. アップグレード・ツールを実行して、Interact のソース・バージョンの構成設定、ファイル、およびデータをアップグレードします。 c. 「Marketing Platform インストール・ガイド」のレポートのアップグレードについての章にある指示に従ってレポートをアップグレードします。 <ol style="list-style-type: none"> 2. 8.5x 以降のいずれかのバージョンを新しいバージョンにアップグレードするための以下の指示に従ってください。

ソース・バージョン	アップグレード・パス
8.5x バージョン以降	<ol style="list-style-type: none"> <li data-bbox="768 222 1456 296">1. 旧バージョンに重ねて新規バージョンのインプレース・インストールを実行します。 設計環境とランタイム環境の両方に対して Interact インストーラーを使用します。 重要: Interact 設計環境をアップグレードする前に Campaign をアップグレードする必要があります。 <li data-bbox="768 474 1456 548">2. アップグレード構成ツールを実行して、構成設定、ファイル、およびデータをソース Interact バージョンからアップグレードします。 <li data-bbox="768 579 1456 672">3. 「<i>Marketing Platform</i> インストール・ガイド」のレポートのアップグレードについての章にある指示に従ってレポートをアップグレードします。

第 9 章 Interact のアップグレードについて

いずれかのバージョンの Interact からアップグレードを行う前に、以下の情報を読み、理解しておいてください。

- 序章 (53 ページの『第 8 章 すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件』)。この章には、すべての IBM EMM 製品のアップグレードに関する重要な情報が記載されています。
- このセクションのすべてのトピック。古いバージョンの Interact から新しいバージョンにアップグレードするために行う必要のある操作が分かります。

Interact のアップグレード

Interact バージョン 8.5.x 以降をアップグレードすることができます。

Interact バージョン 8.5.0 とそれより前のバージョンの Interact の間の構造上の変更により、旧バージョンの Interact からのアップグレード・パスはありません。

以下のセクションでは、Interact のインプレース・アップグレードを実行する方法について説明します。

Interact アップグレード・ツールについて

Interact には 5 つのアップグレード・ツールが備えられています。1 つは設計環境をアップグレードするためのもので (aciUpgradeTool)、4 つはランタイム環境をアップグレードするためのものです (aciUpgradeTool_crhtab、aciUpgradeTool_lrntab、aciUpgradeTool_runtab、および aciUpgradeTool_usrtab)。これらのスクリプトは新しいバージョンの Interact に備えられており、ランタイム環境と設計環境の両方でクリーン・モードまたはアップグレード・モードで IBM EMM スイートのインストーラーを実行した後にのみ使用できます。

Campaign 構成プロパティをアップグレードするときに Interact 設計環境の構成プロパティをアップグレードします。

ツール	場所	目的
aciUpgradeTool	<i>Interact_Design_Install_Directory</i> /interactDT/tools/upgrade	Campaign システム・テーブルの Interact 設計環境テーブルをアップグレードします。
aciUpgradeTool_runtab	<i>Interact_Runtime_Install_Directory</i> /tools/upgrade	Interact ランタイム環境テーブル、および Interact ランタイム環境の構成プロパティをアップグレードします。
aciUpgradeTool_lrntab	<i>Interact_Runtime_Install_Directory</i> /tools/upgrade	Interact 学習テーブルをアップグレードします。

ツール	場所	目的
aciUpgradeTool_crhtab	<i>Interact_Runtime_Install_Directory</i> /tools/upgrade	クロスセッション・レスポンス・トラッキングで使用されるコンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブルをアップグレードします。
aciUpgradeTool_usrtab	<i>Interact_Runtime_Install_Directory</i> /tools/upgrade	プロファイル・ユーザー・テーブルに必要な Interact テーブルをアップグレードします。

どのアップグレード・ツールを実行する場合でも、任意のプロンプトに `abort` と入力することにより、アップグレードを中止することができます。

アップグレード・ログについて

アップグレード・ツールを実行すると、処理の詳細、警告、およびエラーがログ・ファイルに書き込まれます。

デフォルトで、ログの名前は `aci_upgrade.log` で、アップグレード・ツールと同じディレクトリーの `logs` ディレクトリーに置かれます。ログ・ファイルの場所と詳細レベルは `setenv` スクリプト・ファイルで指定されます。それらの設定は、任意のテキスト・エディターで `setenv` スクリプトを開くことにより、ツールを実行する前に必要に応じて変更できます。

パーティションのアップグレードについて

Interact 設計環境に複数のパーティションが含まれている場合、アップグレード・ツールをそれぞれのパーティションに対して 1 回実行します。

重要: パーティションの名前は、ソース・バージョンとターゲット・バージョンで同じでなければなりません。

複数のパーティションが存在する場合、Interact ランタイム環境で追加の手順は必要ありません。

アップグレード時のサーバーの始動と停止について

WebLogic の JDBC ドライバーがマイグレーションで使用される場合、データベース・ドライバーにアクセスできるよう、新規バージョンの Interact ランタイム・サーバーが配置されている Web アプリケーション・サーバーは常に稼働している必要があります。

Interact 8.5x 以上のバージョンからアップグレードする方法

以下のリストに、Interact のサポートされている任意のバージョンから現行バージョンにアップグレードする前に実行する必要があるタスクを示します。

- Interact ランタイム環境をアップグレードします。
- Interact 設計環境をアップグレードします。

- Interact 設計環境およびランタイム環境をアップグレードした後、Interact 実装をアップグレードできるようになります。

Interact ランタイム環境のバックアップ

以前のインストールの Interact ランタイム環境で使用されていたすべてのファイルおよびシステム・テーブル・データベースをバックアップします。1 つのサーバー・グループにつきバックアップする必要がある Interact ランタイム・サーバーは 1 台だけです。

Interact ランタイム環境インストールで新規バージョンの新規 (デフォルト) 設定だけでなく以前の Interact バージョンの構成設定も必要になる場合、configTool ユーティリティを使用して、以前の Interact 構成パラメーターをエクスポートしてください。exported.xml ファイルに別のファイル名を指定し、それを保存する場所のメモを取っておいてください。

Interact ランタイム・サーバーの配置解除

このステップを実行し、Web アプリケーション・サーバーが InteractRT.war ファイル (Interact アップグレード・インストールによって更新される) のロックを解放するようする必要があります。これにより、アップグレードによって問題なく InteractRT.war ファイルが更新され、新規バージョンの Interact が IBM EMM コンソールで登録されます。

1. Web アプリケーション・サーバーの指示に従って、Interact.war ファイルを配置解除し、すべての変更を保存するかアクティブにします。
2. Interact ランタイム・サーバーを配置した後、Web アプリケーション・サーバーをシャットダウンして再始動し、.war ファイルのロックが確実に解放されるようにします。

メモリーからの未使用ファイルのアンロード (AIX のみ)

AIX® にインストールする場合、インストーラーをアップグレード・モードで実行する前に、AIX インストールに組み込まれている slibclean コマンドを実行して、メモリーから未使用のライブラリーをアンロードします。これには、root として slibclean コマンドを実行する必要があることに注意してください。

新規バージョンの Interact のインストール

16 ページの『製品のインストール』にある詳しいインストール・ステップに従い、新規バージョンの Interact をインストールします。インストーラーが既存のインストールを自動的にアップグレードするようするには、以下のステップを実行します。

- 設計環境をアップグレードする際、インストール時にインストール場所を求めるプロンプトが出されたときに、以前の Interact Design Time システムの場所と同じ場所を選択します。
- ランタイム環境をアップグレードする際、インストール時にインストール場所を求めるプロンプトが出されたときに、以前の Interact Run Time システムの場所と同じ場所を選択します。

SQL アップグレード・スクリプトの確認と、必要に応じた変更

Interact に含まれているデフォルトのデータ定義言語 (DDL) を変更したランタイム・システム・テーブルに対するカスタマイズが Interact ランタイム環境に含まれる場合、そのカスタマイズに合わせてデータベースのデフォルトの SQL アップグレード・スクリプトを変更する必要があります。

共通のカスタマイズには、複数のオーディエンス・レベルやテーブルのビューの使用をサポートするための変更が含まれます。列サイズが正しくマップしていること、および追加の製品の外部キー制約が競合していないことを確認するために、新規バージョンの IBM 製品について、データ・ディクショナリーをレビューすることもできます。

SQL アップグレード・スクリプトである `aci_runtab_upgrd` および `aci_usrtab_upgrd` については、ほとんどの場合、改訂が必要です。

重要: Interact アップグレード・ツールを実行する前に、これらの変更を完了する必要があります。

1. データベース・タイプのアップグレード・スクリプトを見つけます。スクリプトは、アップグレード・モードで IBM EMM インストーラーを実行した後の Interact インストールの下の `/ddl/Upgrades` または `/ddl/Upgrades/Unicode` ディレクトリーにインストールされます。
2. Interact に含まれている DDL とデータベース・スキーマが一致することを確認します。アップグレード・スクリプトの DDL とデータベース・スキーマが一致しない場合、環境と一致するように、ご使用のデータベース・タイプ用にスクリプトを編集してください。

SQL アップグレード・スクリプトに対する変更の例

以下の例は、追加オーディエンス・レベルをサポートするために `aci_runtab_upgrd` SQL アップグレード・スクリプトに対して加える必要のある変更を示しています。

既存の Interact 設計環境には、Household という名前の追加オーディエンス・レベルが含まれています。このオーディエンス・レベルをサポートするために、Interact ランタイム環境データベースに `HH_CHStaging` および `HH_RHStaging` という名前のテーブルが含まれています。

アップグレード・スクリプトに対する必要な変更

Customer オーディエンス・レベルのレスポンス履歴および処理サイズを更新する SQL アップグレード・スクリプト内のコードを見つけ、Household オーディエンス・レベルに複製します。これらのステートメント内のテーブル名を、Household オーディエンス・レベルで適切な名前に変更します。

`UACI_RHStaging` テーブルの `SeqNum` 列のデータ型の変更をサポートするように SQL を改訂する必要もあります。SeqNum の値は、すべてのレスポンス履歴ステージング・テーブル全体の連続番号です。次に使用される値は、`UACI_IdsByType` テーブルの `NextID` 列によってトラッキングされます。TypeID は 2 です。例えば、Customer、Household、Account という 3 つのオーディエンス・レベルがあります。Customer レスポンス履歴ステージング・テーブルで最も高い SeqNum は 50 です。Household レスポンス履歴ステージング・テーブルで最も高い SeqNum は 75 で

す。Account レスポンス履歴ステー징・テーブルで最も高い SeqNum は 100 です。したがって、SQL を変更して UACI_IdsByType の TypeID = 2 の NextID を 101 に設定する必要があります。

以下のサンプル SQL ステートメントは、Household オーディエンス・レベルが含まれる、SQL Server データベースの aci_runtab_upgrd_sqlsvr.sql スクリプトで必要な追加を示しています。Household オーディエンス・レベルをサポートするように変更されているテキストは太字で示されています。

```
ALTER TABLE UACI_CHStaging ADD RTSelectionMethod int NULL
go

ALTER TABLE UACI_RHStaging ADD RTSelectionMethod int NULL
go

ALTER TABLE HH_CHStaging ADD RTSelectionMethod int NULL
go

ALTER TABLE HH_RHStaging ADD RTSelectionMethod int NULL
go

insert into UACI_IdsByType (TypeID, NextID) (select 2,
IDENT_CURRENT('UACI_RHStaging') + IDENT_CURRENT('HH_RHStaging')
+ IDENT_INCR( 'UACI_RHStaging' ))
go

select * into UACI_RHStaging_COPY from UACI_RHStaging
go

select * into HH_RHStaging_COPY from HH_RHStaging
go

DROP TABLE UACI_RHStaging
go

CREATE TABLE UACI_RHStaging (
    SeqNum          bigint NOT NULL,
    TreatmentCode   varchar(512) NULL,
    CustomerID      bigint NULL,
    ResponseDate    datetime NULL,
    ResponseType    int NULL,
    ResponseTypeCode varchar(64) NULL,
    Mark            bigint NOT NULL
                                DEFAULT 0,
    UserDefinedFields char(18) NULL,
    RTSelectionMethod int NULL,
    CONSTRAINT iRHStaging_PK
        PRIMARY KEY (SeqNum ASC)
)
go

insert into UACI_RHStaging (SeqNum, TreatmentCode, CustomerID, ResponseDate,
ResponseDate, ResponseType, ResponseTypeCode, Mark, UserDefinedFields, RTSelectionMethod)
(select SeqNum, TreatmentCode, CustomerID, ResponseDate, ResponseType,
ResponseDate, ResponseTypeCode, Mark, UserDefinedFields, RTSelectionMethod from
UACI_RHStaging_COPY)
go

DROP TABLE UACI_RHStaging_COPY
go

DROP TABLE HH_RHStaging
go

CREATE TABLE HH_RHStaging (
```

```

        SeqNum          bigint NOT NULL,
        TreatmentCode   varchar(512) NULL,
        HouseholdID     bigint NULL,
        ResponseDate    datetime NULL,
        ResponseType    int NULL,
        ResponseTypeCode varchar(64) NULL,
        Mark            bigint NOT NULL
                                DEFAULT 0,
        UserDefinedFields char(18) NULL,
        RTSelectionMethod int NULL,
        CONSTRAINT iRHStaging_PK
        PRIMARY KEY (SeqNum ASC)
    )
go

insert into HH_RHStaging (SeqNum, TreatmentCode, HouseholdID, ResponseDate,
    ResponseType, ResponseTypeCode, Mark, UserDefinedFields, RTSelectionMethod)
    (select SeqNum, TreatmentCode, HouseholdID, ResponseDate, ResponseType,
        ResponseTypeCode, Mark, UserDefinedFields, RTSelectionMethod from
        HH_RHStaging_COPY)
go

DROP TABLE HH_RHStaging_COPY
go

```

DB2 および Oracle データベースの場合、UACI_IdsByType テーブルに値を挿入するために以下のステートメントが使用されます。

```

INSERT into UACI_IdsByType (TypeID, NextID)
    (select 2, COALESCE(max(a.seqnum)+1,1)
    + COALESCE(max(b.seqnum)+1,1)
    from UACI_RHSTAGING a, ACCT_UACI_RHSTAGING b );

```

オーディエンスが複数存在する場合、以下の例に示されるオーディエンス・レベルごとに aci_usrtab_upgrd SQL スクリプトにセクションを追加する必要があります。以下の例は、変更後の追加のみを示しています。

```

ALTER TABLE HH_ScoreOverride ADD
    OverrideTypeID int NULL,
    CellCode       varchar(64) NULL,
    Zone           varchar(64) NULL
go

ALTER TABLE HH_ScoreOverride ADD
    Predicate       varchar(4000) NULL,
    FinalScore      float NULL,
    EnableStateID   int NULL
go

CREATE INDEX iScoreOverride_IX1 ON HH_ScoreOverride
(
    HouseholdID          ASC
)
go

```

環境変数の設定

setenv ファイルを編集して、アップグレード・ツールに必要な環境変数を設定します。

Interact 設計環境の場合、ファイルは Interact 設計環境インストールの /interactDT/tools/upgrade ディレクトリーにあります。

Interact ランタイム環境の場合、ファイルは Interact ランタイム環境インストールの /tools/upgrade ディレクトリーにあります。

アップグレード・ツールで必要な環境変数

以下の表は、setenv ファイルの Interact アップグレード・ツールに関して設定する必要のある環境変数を説明しています。

SSL アップグレード用の環境変数は、設計環境とランタイム環境の両方で必要です。

設計環境の setenv ファイルは、

Interact_Design_Environment_Install_Directory/interactDT/tools/upgrade ディレクトリーにあります。

ランタイム環境の setenv ファイルは、

Interact_Runtime_Environment_Install_Directory/tools/upgrade ディレクトリーにあります。

Interact 設計環境

変数	説明
JAVA_HOME	新規 Campaign インストールによって使用される JDK のルート・ディレクトリー。
JDBCDRIVER_CP	JDBC ドライバーが入っているディレクトリーへのパス。これは JDBC ドライバーへのデフォルト・パスです。このパスは、アップグレード・ツールを実行するときにオーバーライドできます。
JDBCDRIVER_CLASS	JDBC ドライバーのクラス。これは JDBC ドライバーへのデフォルト・クラスです。このクラスは、アップグレード・ツールを実行するときにオーバーライドできます。
JDBCDRIVER_URL	JDBC ドライバーの URL。これは JDBC ドライバーへのデフォルト URL です。この URL は、アップグレード・ツールを実行するときにオーバーライドできます。
ERROR_MSG_LEVEL	必要なロギング・レベル。有効な値は以下のとおりです。詳細度が高い順にリストされています。 <ul style="list-style-type: none">• DEBUG• INFO• ERROR• FATAL
LOG_TEMP_DIR	移行ツールのログ・ファイル作成先ディレクトリー。
LOG_FILE_NAME	アップグレード・ツールのログ・ファイルのファイル名。

Interact ランタイム環境

変数	説明
JAVA_HOME	新規 Interact インストールによって使用される JDK のルート・ディレクトリー。

変数	説明
JDBC_DRIVER_CP	JDBC ドライバーが入っているディレクトリへのパス。これは JDBC ドライバーへのデフォルト・パスです。このパスは、アップグレード・ツールを実行するときにオーバーライドできます。
JDBC_DRIVER_CLASS	JDBC ドライバーのクラス。これは JDBC ドライバーへのデフォルト・クラスです。このクラスは、アップグレード・ツールを実行するときにオーバーライドできます。
JDBC_DRIVER_URL	JDBC ドライバーの URL。これは JDBC ドライバーへのデフォルト URL です。この URL は、アップグレード・ツールを実行するときにオーバーライドできます。
ERROR_MSG_LEVEL	必要なロギング・レベル。有効な値は以下のとおりです。詳細度が高い順にリストされています。 <ul style="list-style-type: none"> • DEBUG • INFO • ERROR • FATAL
LOG_TEMP_DIR	移行ツールのログ・ファイル作成先ディレクトリ。
LOG_FILE_NAME	アップグレード・ツールのログ・ファイルのファイル名。

SSL アップグレードをサポートする環境変数 (ランタイム環境および設計環境)

変数	説明
IS_WEBLOGIC_SSL	ターゲット・システムのサーバーには SSL 経由で接続する必要がありますか? 有効な値は YES と NO です。この値を NO に設定する場合、残りの SSL プロパティを設定する必要はありません。
BEA_HOME_PATH	ターゲット・システムの WebLogic サーバーがインストールされている場所へのパス。これは、このパスにある license.bea ファイルを指すために必要です。このスクリプトがターゲット・システムの WebLogic サーバーをローカルで使用できない分散環境でインストールを行う場合、license.bea ファイルをローカルのいずれかのフォルダーにコピーし、この変数を使用してそのフォルダーへのパスを指定します。
SSL_TRUST_KEYSTORE_FILE_PATH	ターゲット・システムの WebLogic サーバーで SSL を構成するために使用されるトラストストアのパス。信頼証明書はここに置かれます。SSL ハンドシェイクで使用されます。
SSL_TRUST_KEYSTORE_PASSWORD	ターゲット・システムの WebLogic サーバーで SSL を構成するために使用されるトラストストアのパスワード。パスワードがない場合、"" に設定するか、何も設定しません。SSL ハンドシェイクで使用されます。

設計環境に対するアップグレード・ツールの実行

アップグレード・ツールを実行する前に、ターゲット・システムで Web アプリケーション・サーバーを始動しておきます。

アップグレード・ツールを実行して、Campaign システム・テーブルの Interact テーブルを更新する必要があります。パーティションが複数存在する場合、アップグレード・ツールがそれぞれのパーティションに対して 1 回実行されるように構成します。

重要: Campaign システム・テーブルのデータ・ソース用の該当するデータベース・クライアントの実行可能プログラム (sqlplus、db2、または osql) は、アップグレード・ツールを実行するユーザーの PATH からアクセス可能でなければなりません。

最新バージョンのアップグレード・ツール (aciUpgradeTool) は、Interact 設計環境インストールの /interactDT/tools/upgrade ディレクトリにあります。対象のバージョンがリストされていない場合、入手可能な最新バージョンを使用してください。要求される情報をプロンプトで入力し、新規バージョンの Interact 用にシステム・テーブルをアップグレードします。ツールが正常に完了したら、アップグレード・プロセスは完了です。

設計環境のアップグレード・ツール (aciUpgradeTool) を実行するために必要な情報

アップグレード・ツール (aciUpgradeTool) を実行する前に、Interact 設計環境インストールに関する以下の情報を収集します。

ターゲット・システムの構成情報

- アップグレードするパーティションの名前
- Marketing Platform がインストールされているディレクトリー
- Campaign 構成ファイル (campaign_configuration.xml) への絶対パス。このファイルは、Campaign インストールの下の conf ディレクトリーにあります。

Web アプリケーション・サーバーを使用して設計環境のシステム・テーブルに接続する場合、以下の情報を収集します。

- ホスト名
- ポート
- ユーザー名
- パスワード
- WebLogic の場合: WebLogic jar ファイルの絶対パスおよびファイル名

JDBC を使用して設計環境のシステム・テーブルに接続する場合、以下の情報を収集します。

- JDBC ドライバーの Java クラス名
- JDBC URL
- JDBC ドライバーに必要な追加プロパティー
- データベースのユーザー名とパスワード

ターゲット設計環境のデータベース情報

- ターゲット設計環境のシステム・テーブルを含むカタログ (またはデータベース)
- スキーマ

- テーブルが Unicode 用に構成されているかどうか

ソース・システムの **Interact Design Time** インストール

- アップグレード前の **Interact Design Time** のバージョン

ランタイム環境に対するアップグレード・ツールの実行

アップグレード・ツールを実行する前に、ターゲット・システムで Web アプリケーション・サーバーを始動しておきます。

アップグレード・ツールを実行して、ランタイム・テーブル、学習テーブル、コンタクト履歴テーブル、レスポンス履歴テーブル、およびユーザー・プロフィール・テーブルの **Interact** テーブルを更新する必要があります。

最新バージョンのアップグレード・ツールは、**Interact** ランタイム環境インストールの下の `/tools/upgrade` ディレクトリーにあります。対象のバージョンがリストされていない場合、入手可能な最新バージョンを使用してください。要求される情報をプロンプトで入力し、新規バージョンの **Interact** のテーブルをアップグレードします。ツールが正常に完了したら、アップグレード・プロセスは完了です。

重要: このスクリプトは、各サーバー・グループで 1 度だけ実行します。

ツールの実行は、次の順序で行う必要があります。

1. `aciUpgradeTool_runtab` を実行して、`systemTablesDataSource` および **Interact** ランタイム構成プロパティを更新します。
2. 組み込み学習を使用する場合のみ、`aciUpgradeTool_lrntab` を実行して `learningTablesDataSource` を更新します。
3. クロスセッション・レスポンス・トラッキングを使用する場合のみ、必要に応じて `/tools/upgrade/conf/ACIUpgradeTaskList_crhtab.properties` を変更し、`aciUpgradeTool_crhtab` を実行して `contactAndResponseHistoryDataSource` を更新します。

`ACIUpgradeTaskList_crhtab.properties` ファイルの変更が必要なのは、**Interact** バージョン 8.x からアップグレードを行っており、**Interact** ランタイムのデータ・ソース (**Interact** | 全般 | `contactAndResponseHistoryDataSource` 構成プロパティで指定される) が **Campaign** システム・テーブルのデータ・ソースと同じでない場合だけです。プロパティ・ファイルには、この状況に必要な 3 つの設定を有効にするための指示が含まれています。

4. `scoreOverride` または `defaultOffers` テーブルを使用する場合のみ、`aciUpgradeTool_usrtab` を実行して `prodUserDataSource` を更新します。

ランタイム環境のアップグレード・ツールを実行するために必要な情報

アップグレード・ツールを実行する前に、**Interact** ランタイム・インストールに関する以下の情報を収集します。

aciUpgradeTool_runtab

ターゲット・システムの構成情報

- Marketing Platform がインストールされているディレクトリー
- Interact 構成ファイル (interact_configuration.xml) への絶対パス。このファイルは、Interact インストール環境の conf ディレクトリーにあります。

Web アプリケーション・サーバーを使用してランタイム環境のシステム・テーブルに接続する場合、以下の情報を収集します。

- ホスト名
- ポート
- ユーザー名
- パスワード
- WebLogic の場合: WebLogic JAR ファイルの絶対パスおよびファイル名

JDBC を使用してランタイム環境のシステム・テーブルに接続する場合、以下の情報を収集します。

- JDBC ドライバーの Java クラス名
- JDBC URL
- JDBC ドライバーに必要な追加プロパティ
- データベースのユーザー名とパスワード

ターゲット・ランタイム環境のデータベース情報

- ターゲット・ランタイム環境のシステム・テーブルを含むカタログ (またはデータベース)
- スキーマ
- テーブルが Unicode 用に構成されているかどうか

ソース・システムの Interact インストール

- アップグレード前の Interact のバージョン

aciUpgradeTool_lrntab

ターゲット・システムの構成情報

- Marketing Platform がインストールされているディレクトリー

Web アプリケーション・サーバーを使用して学習テーブルに接続する場合、以下の情報を収集します。

- ホスト名
- ポート
- ユーザー名
- パスワード
- WebLogic の場合: WebLogic JAR ファイルの絶対パスおよびファイル名

JDBC を使用して学習テーブルに接続する場合、以下の情報を収集します。

- JDBC ドライバーの Java クラス名

- JDBC URL
- JDBC ドライバーに必要な追加プロパティ
- データベースのユーザー名とパスワード

ターゲット学習データベース情報

- ターゲット学習テーブルを含むカタログ (またはデータベース)
- スキーマ
- テーブルが Unicode 用に構成されているかどうか

ソース・システムの **Interact** インストール

- アップグレード前の **Interact** のバージョン

aciUpgradeTool_crhtab

ターゲット・システムの構成情報

- Marketing Platform がインストールされているディレクトリー

Web アプリケーション・サーバーを使用してクロスセッション・レスポンスのコンタクト履歴テーブルに接続するには、以下の情報を収集します。

- ホスト名
- ポート
- ユーザー名
- パスワード
- WebLogic の場合: WebLogic JAR ファイルの絶対パスおよびファイル名

JDBC を使用してクロスセッション・レスポンスのコンタクト履歴テーブルに接続するには、以下の情報を収集します。

- JDBC ドライバーの Java クラス名
- JDBC URL
- JDBC ドライバーに必要な追加プロパティ
- データベースのユーザー名とパスワード

クロスセッション・レスポンスのターゲット・コンタクト履歴テーブルのデータベース情報

- クロスセッション・レスポンスのターゲット・コンタクト履歴テーブルを含むカタログ (またはデータベース)
- スキーマ
- テーブルが Unicode 用に構成されているかどうか

ソース・システムの **Interact** インストール

- アップグレード前の **Interact** のバージョン

aciUpgradeTool_usrtab

ターゲット・システムの構成情報

- Marketing Platform がインストールされているディレクトリー

Web アプリケーション・サーバーを使用してユーザー・プロファイル・テーブルに接続する場合、以下の情報を収集します。

- ホスト名
- ポート
- ユーザー名
- パスワード
- WebLogic の場合: WebLogic JAR ファイルの絶対パスおよびファイル名

JDBC を使用してユーザー・プロファイル・テーブルに接続する場合、以下の情報を収集します。

- JDBC ドライバーの Java クラス名
- JDBC URL
- JDBC ドライバーに必要な追加プロパティ
- データベースのユーザー名とパスワード

ターゲット・ユーザー・プロファイル・データベース情報

- ターゲット・ユーザー・プロファイル・テーブルを含むカタログ (またはデータベース)
- スキーマ
- テーブルが Unicode 用に構成されているかどうか

ソース・システムの Interact インストール

- アップグレード前の Interact のバージョン

Web アプリケーション・サーバーでの Interact ランタイム・サーバーの再配置

新しくインストールしたバージョンの Interact ランタイム・サーバーを Web アプリケーション・サーバーに再配置します。

付録. IBM 製品のアンインストール

以下の操作を行う場合、IBM 製品のアンインストールが必要になることがあります。

- システムの廃棄。
- システムからの IBM 製品の除去。
- システムでのスペースの解放。

IBM EMM 製品をインストールする際、アンインストーラーが `Uninstall_Product` ディレクトリーに組み込まれます。 `Product` は、IBM 製品の名前です。 Windows の場合、「コントロール パネル」の「プログラムの追加と削除」リストへのエントリーの追加も行われます。

IBM アンインストーラーを実行すると、すべての構成ファイル、インストーラー・レジストリー情報、およびユーザー・データがシステムから確実に削除されます。 アンインストーラーを実行する代わりにインストール・ディレクトリーからファイルを手動で削除すると、後で IBM 製品を同じ場所に再インストールする場合にインストールが不完全になってしまう可能性があります。 製品のアンインストール後に、そのデータベースは削除されません。 アンインストーラーにより削除されるのは、インストール時に作成されたデフォルトのファイルのみです。 インストール後に作成または生成されたファイルは削除されません。

Interact をアンインストールする方法

Interact をアンインストールする際には、IBM EMM 製品のアンインストールに関する一般的な指示に加えて、以下のガイドラインに従ってください。

同じ Marketing Platform インストールを使用する複数の Interact ランタイム・インストールがある場合、アンインストーラーを実行する前に、Interact ランタイム・マシンのネットワーク接続を解除する必要があります。 これを行わないと、他のすべての Interact ランタイム・インストールの構成データすべてが Marketing Platform からアンインストールされます。

Marketing Platform の登録解除の失敗に関する警告はすべて無視してかまいません。

Interact をアンインストールする前に、予防措置として、構成のコピーをエクスポートしておくこともできます。

Interact 設計環境のアンインストールを選択する場合、アンインストーラーを実行した後に、Interact を手動で登録解除する必要が生じる場合があります。

`full_path_to_Interact_DT_installation_directory¥interactDT¥conf¥interact_navigation.xml` を登録解除するには、`configtool` を使用します。

1. IBM EMM 製品の Web アプリケーションを WebSphere または WebLogic から配置解除します。
2. WebSphere または WebLogic をシャットダウンします。

3. IBM EMM アンインストーラーを実行し、ウィザードの指示に従います。

アンインストーラーは `Uninstall Product` ディレクトリーにあります。
`Product` は、IBM EMM 製品の名前です。

無人モードを使ってインストールされた製品をアンインストールする際、アンインストールは無人モードで実行されます (ユーザー対話のためのダイアログは表示されません)。

IBM 技術サポートへの連絡

文書を参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM 技術サポートに電話することができます。このセクションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM 技術サポートのコンタクト情報

IBM 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM 製品技術サポートの Web サイト (http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的な事項を確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件（例えば、プライバシー・ポリシー）への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、

および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』を参照してください。



Printed in Japan